

Title	進路発達検査(CDT-2)の研究
Author(s)	中西, 信男
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1976, 2, p. 111-160
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7233
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

進路発達検査 (CDT-2) の研究

中 西 信 男

第1章 進路発達の意義

- I 進路発達の定義
- II 心理学における進路発達の位置
- III 進路成熟の測定

第2章 進路発達検査 (CDT-2)

- I 進路発達検査の発展
- II CDT-2 の構成と採点法
- III CDT-2 の信頼性と妥当性
- IV CDT-2 の下位テスト間の相関および他のテストとの相関
- V CDT-2 の標準化

第3章 進路指導における進路発達検査の意義と応用

- I 進路指導における進路発達検査の意義
- II 進路発達検査の活用

進路発達検査 (CDT-2) の研究

第1章 進路発達の意義

I 進路発達の定義

進路発達の研究においてまずとりあげられなければならないのは、その言葉のもつ意味内容である。これに類する概念として職業的発達、職業的成熟、進路成熟などがあげられるが、これらの言葉とどう異なるかを明らかにすることは、おのずから「進路発達」という概念の成立を明らかにすることである。

1 職業的発達 (Vocational development) という言葉はスーパー (Super, D. E.) によって用いられ、進路選択の理論として提唱されたのであるが、彼自身は1957年の著書で次のような定義を与えている⁴⁾。職業的発達とは「職業行動のすべての例を包摂する成長と学習の過程で、特定の種類の職業行動や職業行動のレパートリーのための個人の能力や傾性の進歩的増加や変容」である。さらに「職業的発達は、この場合、労働 (work) に関連するものとしてみとめられるすべての発達の諸側面にわたっている」としている。

スーパーはその後、しばしば用いられる Career という言葉については「ある人の労働生活における職業、職務、地位の系列。彼の職務が進歩するにつれて、または職業構造のなかである職務から他にかわるにつれて、ある人の人生における出来事の構造化された系列」というようになり限定して定義している。

2 進路発達 (Career development)

スーパーのこの職業的発達理論の提唱後、数年してティードマンらは「進路発達に関するハーバード研究調査」の成果として「進路発達—選択と適応」(1963) という著作をあらわし、その中で、「進路発達とは労働 (work) で同一性を形成するのに関連した個人の経験の継続的な不断の流れの諸側面をいう。」と定義し、それはまた自我同一性 (ego identity) を形成する心理社会的過程のなかで発展する労働への指向性の発達も含まれる²⁾ としている。

こののちには職業的発達という言葉と同様に進路発達という言葉が頻繁に用いられ、書名でもペータース (Peters H. J.) の「職業指導と進路発達」(1966)³⁾、クロール (Krohl, A. M.) らの「進路発達」⁴⁾ (1970) など次第に一般化している。しかしロス、ハーシェンソン、ヒリアードは1970年の時点でも「職業的発達の心理学」(1970)⁵⁾ というように進路発

達という言葉を用いていない。ところが索引ではクローラでもハーシェンソンでも、職業的発達と進路発達とは相互に関連する概念として扱っている。

しかしながら1970年の時点ではほぼ一定の意義が進路発達に与えられている。その一例としてクローラらの定義をあげると、「進路発達とは個人の労働に関連した行動の生涯にわたる系列とパターンを示している、それは正式に職業につく前後の労働に関連した経験や活動のすべてを含んでいる」というように「職業的」というよりも幅広い諸活動の発達まで含めて考えている。

3 進路成熟 (Career maturity)

進路発達よりもさらに積極的な用語として進路成熟という言葉をクリック (Crites, J.) は用いている。元来、職業的成熟という用語はスーパーが1957年にその定義を与えているのであるが、そこでは二種類の意味が与えられている。第1の意味では「職業的成熟は生活段階に焦点がつけられる、そして彼に期待された生活段階と関連させて、その人の実際にある生活段階によって示される。」⁶⁾ 第二に「職業的成熟は発達課題に焦点があてられ、彼が実際に対処している発達課題を扱う個人の行動によって示される。」としている。

クリックはこのスーパーの理論と研究調査から出発して、職業的発達目録 (Vocational Development Inventory; VDI) を1961年から1965年にかけて作成したが、その後1973年にクリックはキャリア成熟目録 (Career Maturity Inventory; CMI) と改称している。その改称の理由として次の三点をあげている⁶⁾。

第一は「進路発達に平行した過程であるキャリア教育が現在強調されている事実を反映している。この二つのもの間の相互交渉は、労働の世界に入り競争するための若もののレディネスの発現に関して共通の焦点があてられる。第二に“キャリア”という言葉には“職業的”という言葉に結びついた特定の意味を持っていない。労働市場における意味のある生産的役割を演ずるのを万人に準備させる出発点と価値体系とをそれは象徴化している。第三に成熟は進歩的变化という概念を把え、かつ伝えている、この進歩的变化とはキャリア認識の探索と意思決定の背後によこたわるものである。そしてこれらはキャリア成熟目録が測定しようとしている変数なのである。

キャリア成熟目録の手引 (理論と調査のハンドブック) の序文でのべられた以上の理由は、今日のキャリア発達の進路指導における意義の重要性をきわめて明確にのべている。

わが国においては、スーパーの職業的発達理論の提唱以来、その数年後に藤本喜八(1955)⁷⁾ 増田幸一 (1957)⁸⁾ の諸氏によって職業的発達や職業経歴類型という概念が紹介されているが、1961年から1962年に出版された中学校進路指導の手びき (学級担任編) (1961年)、および高等学校のホームルーム担任編 (1962年) では進路指導の定義のなかに発達の見方は含まれているが、職業的発達に関しては明確な説明や実践の方向付けはなされていなかった。し

かし、1963年の職業指導主事編やその後さらに10年を経て改訂された「中学校・高等学校・進路指導の手びき」においては「中学校学級担任編」(1974年)では「第7節学級担任による進路指導の評価」のなかに「職業的発達の評価」に関する質問項目が含まれている。また「高等学校ホーム・ルーム担任編」においても、第2章1「高校生の職業的発達をどのように考えたらよいでしょうか」、14「ホーム・ルーム担任の教師による生徒の職業的発達の評価について説明してください」という項で職業的発達が実践的に強調されている。しかし「キャリア発達」、乃至は「進路発達」という用語は個々の研究者の論文では用いられるが、「文部省の手引」や「進路指導」誌上では正式の進路指導用語とは用いられていないようである。いずれキャリア教育の考え方の普及とともに、キャリア発達、または進路発達という用語も進路指導にたずさわる人々にとって職業的発達という用語にかわる重要な概念となるであろう。

以上、外国およびわが国における進路発達の諸定義をみてきたが、最後に進路発達を次のように定義したい。「進路発達とは個人の労働に関する行動の生涯にわたる系列とパターンであり、かつ自己と世界の現実的な機会との総合に努める継続的なプロセスである。」

Ⅰ 心理学における進路発達の位置

心理学の問題として進路発達という現象は発達心理学、社会心理学、相談心理学の諸分野にわたるものである。これらの分野における進路発達の位置づけ、またその理論的な枠組みのなかにおける個々の意味内容を次に検討してみよう。

1 社会的発達の一側面としての進路発達

発達心理学における社会的発達の一側面として職業的発達はこれまで扱われてきた。たとえばドル (DoLL, E.A.)は社会的成熟度を測定する尺度として一般的自律、食事、着衣、自己指南性、意思伝達、移動、社交性、とならんで職業 (occupation) という下位尺度を設けている⁹⁾。またジャーシルドの青年心理学の1957年版では、新たに章を加えてスーパーの協同研究者であるオーバーストリート (Overstreet, P.)による「職業的発達」の項を増補している¹⁰⁾。

このように職業的発達は青少年の社会的発達の一側面であり、したがってそれは一般的な発達の法則に支配されるものである。このような見方でもって、ベイリン (Beilin, H.)¹¹⁾はジャーシルド¹²⁾の示した一般的発達の法則が職業的発達にも該当することを次のような法則について指摘している。

(1) **継続的過程** 「発達は経時的過程である。」職業的選択が一つの過程を意味するという考えは新しくはないし、これまでの研究者によって指摘されていたがビューラー (Buhler, Ch.)らの生活段階の図式やミラーとフォーム (Miller & Form) およびギンズバーグ

のそれはこの法則の顕著な適用例を与えている。

(2) **発達不可逆性** 「発達過程は逆行できない」これはある事象の進歩において二つの異なる時間点、全く同じ状況は実際には存在しないことを言っている。この状況は多くの成熟系列にあてはまる。年齢による衰退のときでも、原点や以前の状態にもどることはない。生活段階の理論や職業的発達理論はこのような考え方を職業的資料に適用した例である。

(3) **発達パターンの分化** 「発達過程はパターンへと分化される。」発達心理学者は成長パターンとか社会的情緒的発達のパターンというようにこのようなパターンをあてはめて記述しているが、職業能力のパターンということが職業文献にみられ、また現在行なわれている他の研究もパターン・アプローチを強調している。

(4) **発達のプレエミネンス (Pre-eminence) の法則** これは個人の行動のレパトリーを確立するとともにその人のエネルギーを集中的に使用するときにおこる。たとえばエリクソンの発達の危機とか、ハヴィガーストの発達課題などはよい例である。職業的発達課題においても、ギンズバーグ (Ginzberg, E.) の研究ではそれぞれの発達段階で職業選択に働く要因が異なることが示されている。このように「発達段階」というのは本質的には個人と環境との相互作用にみられるプレ・エミネンスの認識からみちびかれるのである。

(5) **成熟の水準** 「正常な発達の成果は成熟の増加である。」ある人生の段階である人は成熟していると考えられ、他はそうに考えられない。ある個人の生活の範囲内ですら、彼が成熟している発達の諸側面や彼が未熟な他の諸側面を発見できるかもしれない。不幸にして成熟を構成している概念はいずれか一つの次元を限定するのが困難であり、関連する発達の諸原理だけでのみ推定されるであろう。さらに限定して、ある人が成熟しているか、未熟であるということを職業的発達について言うときには、なおその意味することがばくぜんとしている。職業的発達における段階の概念とプレ・エミネンスの意味は成熟という問題に接近するための一つの可能な基準を暗示している。たとえば、もし現実の考慮が発達の特定の段階で唯一の進路選択のための重要な基礎となるならば、個人差の考慮をしても、特定の年齢における選択の基礎としてのこの因子の出現は、少なくとも、選択の成熟の一つの基準とみられるだろう。

(6) **分化と統合**—これは生物科学におけると同じく社会科学にもあてはまる考え方である。個人が成長するにつれて、興味や価値観がパターンに統合され、ヒエラルキーに秩序づけられ、行動に影響を与える。職業的発達において、自己概念の発達は実体を統合する鍵であるという前提に立って、スーパーはその理論体系をうちたてている。すなわち、「職業的発達とは本質的には自己概念を発展させ、実現させること (implement) である」とスーパーはのべている。

(7) **発達のペース** 「発達のペースは初めの時点で速く、時とともに遅くなる」就学時代

は職業的発達はその選択の変化が速いが、年齢とともに、とくに後期青年期と初期成人期には、選択の数は減少する傾向にある。

(8) **依存から独立への発達** 生物学的にも社会的にも個人は独立の方向へ進歩する。職業的発達においては、個人が解放され、社会的に独立した人となるにつれて、親の影響から選択を自由にする方向へ進歩するとみられる。

(9) **自己中心的行動から社会的行動への発達** ピアジェの児童の思考過程の研究はこの系列を明らかにしたものである。類推される系列は自己概念や言語行動からの他の領域にもみられる。これと並行する研究として職業的発達ではギンズパークの資料で示されている。すなわち、初期の職業選択はやや自己中心的で快楽的側面から職業をみている。職業的発達の後期では、社会的現実への関心が増大し、職業は社会的に考えられてくる。

(10) **相互作用と相互依存** 発達心理学における多くの研究は、行動に対する諸変数の同時的・継時的効果を認知している。たとえばプレ・エミネンスの法則は年齢とともに現実主義が増大することに関係している、そして現実因子がその進路選択において顕著となる。

以上のようにベイリンは職業的発達にもジャーシルドの法則がすべてあてはまることを論証した。一部にやや牽強附会な感もあり、実証されない点も残しているが、しかし概して妥当な説とみてよいであろう。

これらの法則のうち、プレ・エミネンスは発達段階という考えによく示され、ギンズパークやスーパーの職業的発達段階は幼児から老人にいたる職業的側面からみた発達段階を示しているものといえる。それはピアジェの知的発達の諸相やシュトラッツの身体的発達などとならんで、今後の発達心理学における発達段階の区切り方に重要な意義を与えるものとなるであろう。

職業的発達の研究はわが国においては、増田幸一を代表とする「青少年の職業的発達」の研究が昭和33年度から34年度にかけて文部省の科学研究費（総合研究）で行なわれ、「青少年の職業的発達に関する研究報告書」（プリント）として出されており、単行本では沢田慶輔編「青年心理学」において、独立した節として「青年と職業」が扱われ、その後、筆者は永丘智郎編「労働青年心理学」の第2章で「青年と職業観の発達」、また増田幸一監修実践進路指導講座第1巻「進路指導の本質」において「青少年の職業的発達の諸相」¹⁵⁾などで内外の資料による職業的発達の諸相を概説した。また前述の通り、文部省中学校・高等学校進路指導の手引（高等学校ホーム・ルーム担任編）においても「高校生の職業的発達をどのように考えたらよいでしょうか。」という項において、筆者はこのような発達の見方から高校生の職業意識を説明したが、従来の進路指導の実践においてみられなかった新しい視点がかここでは強調されている。

2. 社会化としての進路発達—職業的社会化 (Occupational socialization) または職業化

(Vocationalization)

進路発達とは社会学や社会心理学の領域においても多くの貢献がみられるが、近年、社会化 (socialization) の過程としての職業的発達が注目されている。

社会化とは、マッセン (Mussen, P. H.) によれば、「個人が自分のパーソナリティの特徴、動機、価値、意見、行動の基準、信念などを習得していく過程全体のことである。この中には、両親の育児の実際、学校での訓練、友だち仲間での模倣、宗教的教化、そしてマス・メディアからの教育といったことが含まれる。」¹⁶⁾と定義される。さらにこの社会化の過程は、社会化のエージェント (担い手、すなわち家族、仲間、教師など) や文化的な諸力とのダイナミックな相互作用を通じて、それぞれの個人のもつ個人的特徴 (年齢、性別、発達段階、体質、能力) の制約下で進行するのである。

このような社会化の一側面として職業的社会化を定義すれば、「それが期待されるものであれ、止むを得ぬものであれ、職業や社会的地位をめぐる志向や規範、行動モデルについての学習過程」(ヴァイナー、Weinart, F. E. 1972) であると考えられる。またクライツは「若い人の学校と仕事との関係を概念化する新しい方法は、学習と意思決定が行なわれる発達の布置の認識のなかにその起源をもつ。職業化 (Vocationalization) は児童期や青年期の実験的・時間的ひろがりを含むしている。」とのべている。このような社会化の過程として進路発達をみると、個人をとりまくエージェントを行動モデルとして職業的な技術や知識、職業観を学習する側面がとくに強調され、進路発達の新しい研究の枠組を与えるように思われる。たとえば、ムーア (Moore, W. E) は「社会化 (Socialization) でもって、われわれは認知的学習と、少なくとも、適当な規範の最少の内面化を意味する。」とのべて、家族が子どもの社会化の第一の場所で、それに仲間集団がつけ加わるとし、「家族は教示や訓話を与えるが、しかし同時に成人の役割モデルをも与えている」とのべている¹⁸⁾。しかしムーアによれば、職業的社会化は、一般的な意味での社会化がその焦点を幼児期におくのに対し、職業的社会化は成人期の社会化 (adult socialization) であるとして、①労働市場への参加、②時間厳守や作業速度などの時間的秩序、③社会的相互依存、④合理的遂行、⑤権威への服従、⑥最低水準の能力と作業成績などの規範があげられ、社会化にともなってこれらの職業的な規範が内面化されるとしている。そして学校教育はその内面化に寄与しないのみならず、職業的変化に対応できない弱点があるが、次のような諸点で幸にも学校教育と職業世界との規範の一致点がみられるので、職業的社会化に形式化された学校教育は寄与しているというのである。

(1) カリキュラムや学習計画がもつ成績遂行に進歩的な段階を与えるのみでなく、それが一学期、一週間、一日のなかに含まれていて、それが課題や遂行水準の変化に適応することを要求する。

(2) 学校は相応の報酬によって競争的遂行の場を与えている。

(3) カリキュラムに問題解決法を導入したことは不確定なものへの適応やその不確実なものへの創造的支配を奨励している。

以上のような諸点から、学校教育は職業的規範の内面化に寄与しているとムーアは主張している。それは米国における学校教育の一面をよく示していると思われる。

わが国の研究として、新井真人は職業的社会化という論文のなかで、(1)職業上の役割遂行、(2)知識技能の獲得、(3)集団内における職業観形成、(4)職業的エネルギーの消費を職業的社会化の問題としてあげている¹⁹⁾。

橋本昭治は職業的社会化の職業指導上の意義として、「職業をめぐる人間行動のどの側面が、発達のどの時点で、どのような社会化のエージェントの影響の下で形成されていくかを詳細に分析する職業的社会化の研究が必要なことはいくらかである」²⁰⁾と主張している。従来の職業心理学が見おとしてきた一面をよく指摘していると思われる。

3. 職業的選択理論としての進路発達

相談心理学の起源の一つが職業指導運動にあるのだから、職業的発達もまた重要な研究テーマであって、相談心理学誌 (Journal of counseling psychology) では論文を (a) カウンセリング過程 (Counseling process), (b) 職業的発達 (Vocational development), (c) グループ・カウンセリング (Group counseling) の三つの領域にわけて掲載している。ここで進路発達が問題となるのは職業的選択理論の一つとしてである。

ヒューワー (Hewer, V.H.) によれば職業的選択理論は三つに大別される²¹⁾。

第一は特性因子論であって、パーソンズ (Parsons, F.) 以来の伝統的な考え方で、ウィリアムソン (Williamson, E.) らによって理論的構成がなされているが、個人差に応じた職務や教育コースの選択をはかるものである。

第二は構造理論とよばれるもので、進路選択における動機的側面を重視する立場である。ヒューワーはこれに精神分析的立場とロー (Roe, A.) などの欲求説、さらに自己概念説を含めているが、自己概念説は職業的発達理論とも密接な関係がある。

第三が発達理論である。スーパーは「発達理論は職業が一生の間連続的に生起することとそれが類型化することに重点をおき、職業訓練または労働市場にはいる時点における特定の職業選択の規定要因に重点を置く理論と対照をなす。」とのべて、さらにこれを²¹⁾ 自己概念理論と²²⁾ 職業的成熟理論の二つに分類している。

(1) 自己概念および職業的自己概念

自己概念理論はスーパーの職業的発達理論のなかにとり入れられた概念であるが、元来はスナイグとコムズ (Snygg & Combs) やロージャズ (Rogers, C.) らの現象論的自己論に由来するもので、ロージャズによれば「自己概念とは、認知されている自己 (self) についての知覚の組織された附置状況である」と定義される。スーパーはこの現象論的自己概念

を職業選択理論に適用して、次のようにそのプロセスを考えている²²⁾。職業的発達はずり自己概念の形成にはじまり、つづいて職業モデルとの同一視や役割経験、観察などの過程を経て、自己概念を職業上の役割におきかえ、現実的な体験を通して、それを吟味し、やがて自己概念に適合した行動のとれるような職業を選択するという過程をとるとしている。オハラとティードマンは青年期において、職業的自己概念 (Vocational self-concept) が発達する証拠を示している。

(2) 職業的成熟または進路成熟の基準と次元

職業的成熟の基準はすでにスーパーの最初の発想のなかでかなり明確に示されている。彼はその著 *The psychology of careers* において「職業的成熟は、発達の程度を示すため、すなわち探索から下降までの職業的発達の連続線上で到達した位置を示すためにつかわれる²³⁾」として、精神年齢 (Mental age) になぞらえて職業年齢 (Vocational age) を考え、青年期まではその両者は並行しているが、青年期から分化するとしている。そして知能指数に相当する職業的成熟指数 (Vocational Maturity Quotient) を想定し、「将来これは発展させられるかもしれない」と、1957年の時点で予想している。そしてさらに具体的に職業的成熟の次元として次の5つをあげている²⁴⁾。

① 職業選択への方向づけ (Orientation to vocational choice)

職業選択に関心をもつものはそうでないものよりも、選択の必要に直面したときは選択への構えと能力があると仮定される。しかしこの指標は後期の成人期では適用できないかもしれない。

② 選ばれた職業についての情報と計画 (Information and planning about preferred occupations)

青年期以後では教育的職業的決定をするためには、選ばれた職業分野についての情報を引き出すことが必要となる。その情報の種類としては(a)訓練上、身体的、心理的、経済的な必要条件、(b)職務、(c)作業条件、(d)機会などに関するものである。そしてその計画が現実的かどうかによって評価される。

③ 職業に対する好みの一貫性 (Consistency of vocational preference)

職業的に成熟すればするほど、目標を狭め、あまり心を引きつけない好みを排除し、探索と試行による試練に耐えてきた好みを結晶化するようになる。この一貫性はさらに下位の次元として(a)時間、(b)分野、(c)水準、(d)職業群の一貫性が評価の着眼点となる。

④ 特性の結晶化 (Crystallization of traits)

発達とは一般性から殊別性へと進行するものだから、個人の能力と特性が発達していればいるほど高度に分化し、かつ安定した人間であるはずである。この次元はさらに多くの側面をもち、(a)興味テスト上の位置、(b)興味の類型化、(c)興味の成熟度、(d)職業的独立性、(e)現

実性, (f)仕事に対する価値観の類型化などについて考慮されるが, このうち職業的独立性についてはスーパーは第9学年の生徒の指標として, ④仕事の源泉, またはいかにして仕事を獲得するか, (g)家族, 友人, 他人など仕事への援助, (h)職務への監督, またはそれからの自由の程度, (i)仕事 (work) の水準と課題 (task) の複雑性, (k)経験の程度, または職務についた期間と数。たとえば, もし仕事への監督がつねになされ, 仕事が家族を通して得られたのであれば, そのような子は職業的に独立しているとはいえない。

⑤ 職業の好みについての知恵, (Wisdom of vocational preference)

これはもっとも複雑で困難な概念であるから, 職業的成熟度に関する以上の次元は職業の好みか賢明でないかぎり, 職業的適応に結びつくとは思えないので, もっとも重要な概念とされる。これは能力と好みの関係, その他活動と好み, 興味と好み, 興味の職業水準と選択された職業水準のそれぞれの関係が考慮される。

このようにスーパーは職業的成熟の基準と評価尺度を示したが, それを測定するインベントリーはかなりのちになってから作成している。これに対し, スーパーの研究協力者であったクライツ (Crites, J.) は職業的発達を測定する目的でもって, 従来の職業的成熟の基準を整理して, (1)選択要因, (2)独立, (3)自発的-受動的とりくみ方, (4)手段-目標認識, (5)時間計画, (6)自日夢と空想, (7)自己知識, (8)職業知識, (9)自己と仕事などの九つの変数をあげている。

さらに彼は Career Maturity Inventory の作成にあたってヴァーノン (Vernon, P. E.) の知能の因子構造に暗示を得て, 図1のような進路成熟のモデルを示している。スーパーの職業的成熟の次元をさらに因子分析した結果, 進路選択の一貫性 (Consistency of career choices) と進路選択の現実性 (Realism of career choices) のグループはそれらが最初にスーパーによって提案された通りであるが, 唯一の改訂は, 選択の一貫性の因子では家族の変数を削除し, 選択の現実性 (スーパーのいう選択の知恵) の因子では活動のかわりに人格を入れかえた。進路選択の有能性と進路選択の態度はスーパーの職業選択の方向づけ, 情報と計画, および特性の結晶化から図式化されたものである。これらの変数はクライツの進路成熟目録 (CMI) の進路選択能力尺度と進路選択態度尺度で測定されることができる。

スーパー, クライツらの職業成熟の次元, および進路成熟の因子に関する提案は発達の見方になつた進路指導の実践に大きな影響を与え, その進路成熟の測定と評価への関心を大いに高めた。

III 進路成熟の測定

以上進路発達の諸理論をみてきたが, これが実践的な意義をもつには, まず進路成熟が確実に測定されるか否かということにかかっており, 進路発達の諸研究の焦点はここに数年間

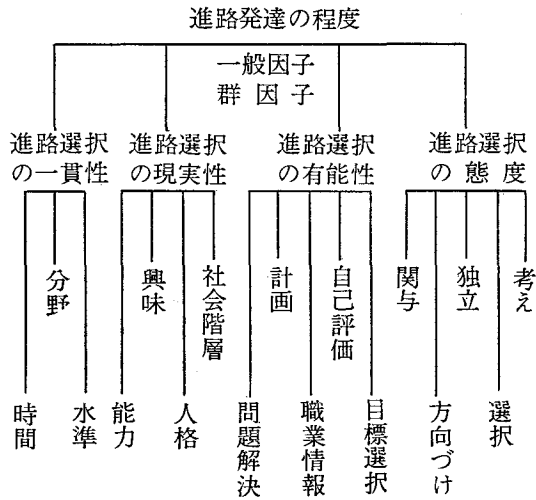


図1 青少年の進路成熟モデル
(Crites(1973))

に職業的発達または進路成熟の測定法にしばられてきた。

職業的発達理論の提唱の当初から問題にされ、スーパーによって「将来これは発展されるかもしれない」と予想され、かつ知能指数に匹敵すべき職業的成熟指数が提案されながら、それが実践的に使用される道具として完成れるまでには20年の歳月を要したのである。その間、スーパーの協同研究者であるクライツは1964年に職業発達目録 (Vocational Development Inventory, VDI) の試案を発表して、この方面の研究の先駆的業績を示して以来、多くの研究者たちにその分野についての関心を刺激してきたが、米国におけるキャリア教育 (Career Education) の開発的な研究から本格的な実践へと移行するにつれて、進路発達についての評価の必要性が叫ばれてきた。折しも、1975年にリスボンで開かれた国際進路指導協会 (LAEVG) のセミナーにおいて、スーパーが彼の作成した Career Development Inventory: CDI の国際比較による協同研究を提唱するに当たってこの動きは最高潮に達したといわれてよいであろう。この提案に13カ国の学者が賛同し、わが国ではかねてから CDI の日本版改訂を行ってきた立教大学藤本喜八教授が参加された。

かくしてここ10年ほどの間に進路発達を測定評価する各種の調査や検査が開発されたが、広井は「進路指導」誌の特集「進路指導の評価」(昭和50年11月号)において職業的発達の測定法として、F式選職能力テスト(福山重一1949)、キャリア成熟調査 CMI (J. クライツ, 1967~1973)、職業計画への準備性RVP (W.D.グリボンズ, 1964)、進路発達検査 CDT (中西信男, 1965)、職業レディネス・テスト VRT (職業研究所 1972)、キャリア発達調査 CDI (D.E. スーパー, 1973) の6種をあげて、それぞれに簡単な解説を与えているが、こ

ここではそれをもとに一部補説しながら、現在ある諸調査・検査の内容を通覧してみよう。

1 F式選職能力テスト (福山重一)

スーパーの職業的発達理論が提唱される以前の1949年に作成されたもので、進路指導の目標は生徒の職業選択能力を高めることであるとして、その選職能力を測定するために(1)自己分析能力、(2)職業分析能力、(3)職業試行経験の3尺度から構成されている。

2 職業計画への準備性 (Gribbons, W. D. & Lohnes, P. R.)

グリボンズとローンズは1964年に面接法による職業計画の評価の方法を発表している。彼らはアプリオに八つの因子、すなわち(1)カリキュラムの選択、(2)職業の選択、(3)教育的職業的選択に関して自分の長所・短所の関係を言語化する能力、(4)生徒の記録やテスト結果を比較したときの自己評価の正確さ、(5)自己評定に対して生徒があげている証拠の質、(6)職業選択に対する興味や、(7)価値観の関係の認知、(8)選択における独立性と責任感などをあげている。これは性別、IQ、カリキュラムの水準、社会経済的地位などの17の独立変数について比較されたが、これらのうち自分の修学能力を正確に評価する能力とこれらの推定を根拠だてることの二つの因子が、大学準備コースのものと他のコースのものとの有意差がみられた。しかしその後この尺度は十分に発展させられていない。

3. キャリア成熟目録 (Career Maturity Inventory; 略称, CMI, Crites, J.)

クライツは1961年に合衆国教育局の後援のもとにアイオア大学において職業発達目録 (Vocational Development Inventory: VDI) を作成した。VDIは(1)能力検査 (Competence Test) と(2)考え方検査 (Conception test) からなり、能力検査はさらに①問題、②計画、③職業情報、④自己知識、⑤目標選択の5つの下位検査にわかれる。また考え方検査は個人の職業的態度や行動を記述した100項目の文章からなっている。

すでにしばしばふれているように、クライツのこのVDIは1973年版ではキャリア成熟目録 (Career Maturity Inventory) と改称され、その最終的な形式は次のように構成されている。(1)能力検査は研究版として出されているが、①自己評価 (尺度: 第1部: 汝自身を知る, 20問)、②職業情報 (第2部: 仕事について知る, 20問)、③目標選択 (第3部: 仕事を選ぶ, 20問) ④計画 (第4部: 見通しをもつ, 20問)、⑤問題解決 (第5部: 彼等は何をなすべきか, 20問) からなっている。(2)考え方検査は態度尺度 (attitude scale) と改称されて①職業選択過程、②仕事への指向性、③意志決定の独立性、④職業決定要因の好み、⑤進路決定過程の考え方に関する50の質問からなっている。このCMIは小林純一、Bourkeの両氏によって日本版が作成され現在日米の比較研究が行なわれている。

4. 進路発達検査 (CDT, 中西信男)

広井は「クライツの構想にヒントを得たが、氏独自の考えで構成されたテストである。」とのべているが、この点について少し補足したい。しばしばCDTはクライツのVDI (現在の

名称 CMI) の改訂版であるという誤解をうけるが、1966 年当時、筆者がこのテストの作成を思いついたのはボロウの編集の *Man at work in the world* の論文を翻訳しているときにクライツの VDI のことを知ったからである²⁸⁾。しかし、テストそのものはまだ作成過程であったのでそのうちに引用された二、三の質問項目について知っていただけである。したがって完成されたテストの構成およびテスト項目はクライツの VDI (CMI) とは全く異なっている。しかしスーパーの CDI を含めてテストの目的は同じであるから、相互の影響を全くないとはいえない。それは名称の変遷についてあらわれている。クライツの VDI (Vocational Development Inventory) という名称に対して、筆者はすでに職業指導という名称が進路指導と改められているわが国の現状にあうように、CDT-1 (Career Development Test-1) と命名した²⁹⁾。たまたま、職業的発達理論に関する1969年ワークショップに講師として来日されたスーパー博士に藤本教授を通じてお会いしたとき、この CDT の内容をくわしく話した。その後、スーパー博士は後述する CDI (Career Development Inventory) という名で新しい尺度を1972年に発表された。その翌年の1973年にクライツは VDI を CMI (Career Maturity Inventory) と改めた。この三つの名称の近似性は一方的に米国のそれを模倣したというより、むしろこれら三つのテストの相互影響があったのであり、その背景には Vocational Guidance から Career Guidance という理念上の大きな変遷があったことも見逃すことができないのである。

CDT は (1)進路希望プロフィール、(2)進路知識 (20項目)、(3)職業的統覚検査 (VAT)、(4)進路成熟 (30項目) から構成されているが、これらの内容は次章において詳述する。

5. キャリア発達目録 (Career Development Inventory: 略称 CDI, Super, D.E.)

スーパーもその最初の提案以来、20年ののちにキャリア発達を測定する目録を1972年に発表している。これは(A)計画の方向づけの度合 (33項目) (B)探索のための情報源の利用 (28項目)、(C)情報と選択決定 (30項目) である。(A)と(B)の両尺度は態度尺度であるが、Cは適性や進路の情報を判断して意志決定する認知的なテストである。CDI は、現在、立教大学の藤本教授によって日本版の改訂が行なわれている。

6 職業レディネス・テスト (職業研究所)

これは1932年に同研究所の道脇正夫らを中心として作成されたもので³⁰⁾、このテストは、「生徒個人が彼の職業的自己概念をチェックし、自分で考え、方向性を探索する」ためのものである。このテストはA、B、Cの3つの下位検査から構成されているが、AとCは同一の項目で、主として職業の内容を記述した39の質問が設定され、Aテストは職業的興味の強さ、Cテストでは自信の程度が調べられる。Bテスト (20項目) は対情報関係(D)、対人関係(P)、対物関係(T)の三つの志向性が測定される。

以上の諸テストは現在、問題にされている進路発達の程度を測定するのに有効な評価方法

とみられるが、教師の直接的な観察による評価を補いつつ進路指導の実践に今後大いに活用されると考えられる。次の章においては、このうちの CDT についてその作成の過程、構成、活用の方法などについて詳述したい。

第2章 進路発達検査(Career Development Test;略称CDT-2)

I 進路発達検査の発展

本検査の開発は昭和40年度、41年度に文部省科学研究費試験研究による「中等教育段階における進路指導の研究」(代表駒田錦一)において阪大文学部教育学科の各教官が分担したうち、教育心理学班が担当した「中等教育段階における進路発達の研究」⁸³⁾において、はじめてとりあげられた。この研究の目的は進路発達を能力的態度的側面から測定評価する方法の開発を行なうのであるが、当時たまたま筆者が翻訳中であった Borrow, H. (ed) Man at work in the world 中の Crites の論文からヒントを得て、進路発達の主として態度的側面についての測定尺度の作成に思いあたった。作成にあたっては田中教授をはじめとする他の研究協力者、とくに当時助手であった柏木道子氏に多大の協力を賜わった。

昭和41年(1966年)の時点で一応その試案(CDT-1)ができ上がったが、その後、文部省教育研究開発に関する調査研究「生徒の特性分化の時期と、中高を通じる観察指導の充実強化に関する研究」(代表中西信男)において、昭和47年から49年の3ケ年にかけてテストの一部の改訂と増補を行ない、現在の形式に完成させた。今後なお改訂の必要はあるが、今回の研究報告はこれまでの研究調査をまとめて、一応、テストを完成させたものである。

II CDT-2 の構成と採点法

前述のように進路発達検査は四つの部分から構成されている。

1 職業希望プロフィール

第1頁は Identification Column と職業希望プロフィールおよび進路希望理由からなっている。進路希望プロフィールは後述するように職業世界についての関心と職業的自己概念を明らかにするためのもので、職業選択理由はこれまでギンズバークやスーパーがとりあげた選択理由の発達をみようとするものである。職業希望プロフィールはこれまでの諸調査で中学生が希望している職業のうち代表的なもの、およびそれに基本的な職業の一、二(農業、女子では主婦)をえらんで代表的な15の職種をあげ、それぞれについて「1.全くなりたくない」「2.なりたくない」、「3.どちらともいえない」、「4.なりたい」、「5.非常になりたくない」、5つのカテゴリーのいずれかに応答させた。なお、これまでの強制選択式の回答形式

を補うために第16番目にもっともなりたい職業を書かせた。男子と女子では希望職種が異なるので15種のうち12種は共通として、3種のみ男子用、女子用の職種をあげている。(巻末検査票参照)

希望職業のリストの次にこれらの職業をえらぶ場合に重視した選択理由として次の5つをあげた。(イ)収入・安定、(ロ)個性・能力、(ハ)地位・名声、(ニ)助力・協力、(ホ)社会的有用・使命で、このうち(イ)と(ハ)はローゼンバークの職業的価値群のなかでは外在的報酬にあたり³²⁾、(ロ)は自己実現、(ニ)は対人指向の諸価値であり、このほか使命としての職業として(ホ)をつけ加えた。これらの選択理由は発達的に変化することがすでに多くの研究者によって明らかにされている。

表1 採点表

項目	正答番号	項目	回答	
職業知識の正答肢	1	進路の鍵	1	はい
			2	いいえ
	2		3	はい
	3		4	はい
	4		5	いいえ
	5		6	いいえ
	6		7	はい
	7		8	はい
	8		9	はい
	9		10	はい
	10		11	はい
	11		12	はい
	12		13	いいえ
	13		14	はい
	14		15	いいえ
	15		16	いいえ
	16		17	はい
	17		18	いいえ
	18		19	はい
	19		20	はい
20	21	はい		
	22	いいえ		
	23	はい		
	24	いいえ		
	25	はい		
	26	いいえ		
	27	はい		
	28	いいえ		
	29	はい		
	30	はい		

2. 職業知識尺度

テストの第2～3頁は20の職業について資格や適性についての質問が設定され、それに対し、それぞれ3つの選択肢よりなる回答が用意されている。正答は、表1に示されるとおりであるが、採点は正答を各1点として、0から20点までの得点が与えられる。

3. 職業的統覚テスト (VAT)

これはアモンズらのVocational Apperception Test (VAT)³³⁾からヒントを得たものであるが、VATが男子用として(1)教師、(2)事務員、(3)医師、(4)法律家、(5)教師、(6)ソーシャル・ワーカー、(7)セールス・マン、(8)実験技術者の8枚、女子用図版として(1)実験技術者、(2)栄養士、(3)店員、(4)看護婦、(5)教師、(6)芸術家、(7)秘書、(8)ソーシャル・ワーカー、(9)母親、(10)主婦の10枚の図版から構成され、かつ大学生を中心として標準化されているが、CDT-2ではさきあげた15の職業から男子用として(1)ジャーナリスト、(2)販売員、(3)事務員、(4)技能員、(5)教師、(6)科学者、(7)医師、(8)法律家、(9)運転手、(10)農夫、また女子用として(1)ジャーナリスト、(2)販売員、(3)事務員、(4)技能員、(5)教師、(6)科学者、(7)看護婦、(8)美容師、(9)ドレス・メーカー、(10)主婦のそれぞれ10種の代表的な職場のシーンが、主に中学生・高校生のえらぶ職種を中心としてえがかれている。画もアモンズのそれがコンテのデッサン画で

あるのに、CDT-2はマンガ化された線画を用いている。このほうが中、高校生にはより親しみを感じさせるからである。

職業統覚検査の目的は第一頁の進路希望プロフィールが「なりたいたい—なりたくない」という回答を用意した構造的な調査であるのに対し、ここではより漠然とした刺激で、多様な反応を引き出させる非構造的なテストとなっており、この構造的と非構造的な二つの方法によって職業的自己概念を明らかにしようとするのである。

分析の方法としては次のようなカテゴリーが用意されている。

- (A) 態度 各図版の(イ)すき (ロ)きらいを質問する。これは第一頁の各職種のなりたいたい—なりたくないの方向性が一致するかどうか分析される。またすきな職業、きらいな職業で人物のとらえ方がどのように変化するかがみられる。
- (B) 理由 仕事をえらんだ理由を中心として①興味、②能力、③地位、④収入、⑤安定、⑥対人指向、⑦使命、⑧雇用の機会、⑨強制、⑩訓練などの理由が考えられる。これによって、この生徒の進路発達の程度が評価されるとともに、進路選択の動機がどのあたりにあるかが明らかにされる。
- (C) 仕事をつづけるときの葛藤の有無と分野 仕事をしている主人公がどのような葛藤をもっているか、①個人内の欲求間の葛藤、②家族との葛藤、③経済的葛藤、④教育的葛藤、⑤職業的葛藤、⑥健康的葛藤、およびこれらの諸葛藤の重複などが注意される。これは進路選択の成熟水準とともに将来の職業生活における適応についての予測をすることができる。
- (D) 葛藤解決に用いたメカニズム 前項で示された葛藤に対して対処的行動 (coping behavior) で対したか、防衛的行動 (defensive behavior) を用いたかによってその生徒の自我発達の水準が評価されるとともに、将来の職業生活における適応の予測がなされる。ここで対処行動様式とみられる葛藤解決の様式は(イ)受容、(ロ)妥協、(ハ)解明などであり、防衛的行動としては(イ)攻撃、(ロ)逃避、(ハ)反動形成などである。
- (E) 結果 主人公がそれぞれの物語で成功したか、失敗したかが分析され、次のような分類カテゴリーで示される。①成功、②仕事をつづける、③職場から離れる、④災害にあり、⑤不成功、また女子には、⑧結婚しても仕事をつづける、⑨自分が興味をもっている仕事についている人と結婚する、⑩結婚して仕事をやめるなどの反応も考えられる。

4. 進路成熟尺度

進路成熟尺度は自発性、独立性、計画性を示す特性を測定する尺度で30項目からなっている。

(1) 自発性 (質問項目1から10までの10項目)

進路成熟している生徒は、進路への自発的、積極的な関心をもっていると考えられ、日常

生活での興味や関心が主体的に進路と関連づけられているはずで、これらの内容を含む項目よりなっている。

(2) 独立性 (質問項目11から20までの10項目)

自分の進路に関する決定や決定に達するまでの過程が他人に依存的でなく、自己の決意と責任においてなされることが進路成熟の一要件であると考えられ、これらの内容を含む項目より構成されている。

(3) 計画性 (質問項目の21から30までの10項目)

自分の進路に関する方法・手段と時間的な計画の有無も成熟の必須要件であると考えられる。自分の進路に対してより具体的で有効な手段を見つけ、かつより長い時間的展望がもたれることがのぞましい。このような内容を含む項目から構成されている。

これらの質問には「はい」「いいえ」のいずれかに回答をさせる。採点は得点の鍵(正答は表1を参照)に一致したものは2点、「わからない」には1点が与えられる。(ただし三分の二以上の「わからない」と回答したものは無効とする。得点は0から60点までの分布が理論的に考えられる。

Ⅲ CDT-2 の信頼性と妥当性

CDT-2 を構成する下位尺度のうち統計的な吟味が不可欠なものは(3)進路知識と(4)進路成熟の2尺度であるので以下ではこれを中心として検討したい。

1. 信頼度

(1) 折半法による方法

昭和48年度に調査した中学生、高校生を男女別にもとめたのが表2である。

表2 折半表による信頼度

		人 員	職業知識	進路成熟
男子	中学生	78	0.3957	0.5382
	高校生	83	0.4606	0.5354
女子	中学生	77	0.3343	0.4936
	高校生	84	0.4040	0.4263

これらの結果はテストとしては十分に高い信頼度を示していない。とくに知識テストは認知的側面であるから、もっと高い値が出るはずであるのに態度的側面をみている進路成熟よりも低い値を示している。これはかなり異質な質問項目から構成されているとみられる。

(2) 再検査法による方法

〔職業知識〕大阪の中学1年と2年、2年と3年の1年間の間にみられた相関は男子では

1年と2年が0.515, 2年～3年が0.406, 女子では1～2年が0.467, 2～3年が0.321であった。

〔進路成熟〕大阪の中学2年と3年の1年間の間にみられた相関係数は男子では0.7402, 女子では0.3372であった。

この結果は男子の進路成熟では折半法よりも高い値を示しており, 中学生の男子では進路成熟度がかなり安定していることを示している。女子ではこの2年と3年の間に著しい進路成熟がみられるため個人間の成熟の序列もかなり不安定になるらしく, 低い相関を示している。職業知識については男女間にあまり差はみられない。

2. 妥当性

構成的妥当性の検討のためにそれぞれのテスト項目への反応と総点との相関関係から対象を正しく把握しているかどうかをみるために職業知識, 進路成熟の検査項目についてGP分析を行なった。結果についてはすでに1967年に発表したので³⁴⁾, つぎに主として年齢集団間の横断的縦断的な比較を行なって年齢集団間に差があるかどうかを検討した。

1) 学年間にみられる CDT の得点の差違 (横断的研究)

調査対象としては大阪市内の私立O学院の中学部, 高等部, 兵庫県郡部のK中学と同一学区のK普通高校, また山口県市部のH中学2校と同一学区のH普通高校である。

〔職業知識〕各学校別に示したのが表3abcである。これらの各校の学年による発達を男女別に示したのが図2である。またこれら3校のデータをプールして男女別学年別に示したのが表3dである。表3dより学年間の差をtテストした結果, 男子では中1と中3の間, 中1と高1の間で1%レベルで差がみられた。女子でも中1と中3, 中3と高3, 中1と高1の間で1%でもって差がみられた。男子では各群とも学年とともに上昇がみられるが, 学校間では高1でK校とH校の間で5%レベルで差がみられた。女子では発達による知識の増大は男子ほどではない。学校間の差は中3でO校とH校の間で5%レベルで差がみられた。

〔進路成熟度〕進路に関する関心や自発性は男女とも学年とともに上昇しているが, 中学3年時よりも高校1年時に下降する学校もみられる。当然中学3年の方が進路への関心が高かったためと思われる。すなわち, 表3dより学年間の差をtテストした結果, 男子では中1と高1, 中1と高3, 高1と高3の間で1%レベルで差がみられた。また女子では中1と中3, 中1と高3, 高1と高3の間で1%レベルでまた中3と高1の間で5%レベルで差がみられた。学校差としては女子の中学3年においてO学院とK中学の間に2%の有意水準で差がみられるほかは有意差はない。

表3a 職業知識および進路成熟度の発達 (O学院—大阪市)

		男 子				女 子					
		中 1	中 3	高 1 (普通)	高 3 (普通)		中 1	中 3	高 1 (普通)	高 3 (普通)	
職業知識	1	M	5.4385	7.1315	6.7857	7.6585	M	5.7999	6.9583	7.3928	7.9666
		SD	1.6331	1.6570	1.6552	1.7194	SD	1.7204	1.7554	1.7594	1.4940
	2	M	6.4912	7.7763	7.8095	7.4878	M	6.9777	7.6041	7.1785	7.8999
		SD	1.9656	1.2418	1.1177	1.9769	SD	1.8677	1.7289	2.0711	1.2476
	合計	M	11.9298	14.9078	14.5952	15.1463	M	12.3111	14.5625	14.5714	15.8666
		SD	3.0599	2.1775	2.3407	3.2276	SD	2.7310	3.1616	3.4478	2.3767
進路成熟度	A	M	9.5964	9.1184	10.5952	10.3658	M	9.1111	10.3958	8.8923	10.9666
		SD	3.7127	3.4180	3.8233	3.3037	SD	3.3348	3.5103	4.2117	3.4106
	B	M	11.7719	14.8026	14.2142	6.6585	M	12.6222	14.9166	14.5357	16.7999
		SD	3.4438	3.0175	3.6156	2.2804	SD	2.6856	2.6523	3.0175	2.0066
	C	M	9.9824	11.1710	10.7142	11.0243	M	9.6444	10.5625	11.3214	12.5000
		SD	3.4513	4.1115	3.5742	4.1171	SD	3.7127	3.6623	3.4646	3.9728
	合計	M	31.3508	35.0921	35.5238	38.0487	M	29.5777	35.8750	34.7500	40.2666
		SD	8.0469	7.0862	8.3444	6.6146	SD	6.1408	7.3869	8.4372	6.7869
調査対象(N)			57	76	42	41		45	48	28	30

表3b 職業知識および進路成熟度の発達 (H中・H高一山口県市部)

		男 子				女 子					
		中 1	中 3	高 1 (普通)	高 3 (普通)		中 1	中 3	高 1 (普通)	高 3 (普通)	
職業知識	1	M	4.6458	6.5714	7.5909	7.0789	M	5.2666	6.2000	7.4523	7.5714
		SD	1.7259	1.7747	1.5857	2.0180	SD	1.7876	1.8734	1.7348	1.0942
	2	M	6.4791	7.2619	8.2045	7.3947	M	7.3000	6.8500	7.5714	8.2380
		SD	1.6831	1.3811	1.1397	2.0716	SD	1.6563	1.7965	1.7476	1.0421
	合計	M	11.1250	13.8333	15.7954	14.4736	M	12.5666	13.0500	15.0238	15.8095
		SD	2.8984	2.5346	2.1593	3.7956	SD	2.9403	3.0736	2.9397	1.6795
進路成熟度	A	M	9.0416	10.0238	10.2500	9.3684	M	9.1333	9.5250	10.0000	11.2142
		SD	3.2848	3.7064	3.6063	3.9895	SD	3.5282	3.3240	3.4572	3.4193
	B	M	12.5625	14.4047	16.1136	15.1052	M	12.4000	13.4000	15.6428	15.6666
		SD	3.4875	2.6997	3.1566	2.8542	SD	2.4166	2.7820	2.6887	2.6427
	C	M	8.2500	9.8571	9.2954	11.2368	M	9.0333	8.0250	10.1428	13.1904
		SD	2.9261	3.3705	3.8113	3.4900	SD	3.6558	3.4891	3.8580	3.6203
	合計	M	29.8541	34.2857	35.6590	35.7105	M	30.5666	30.9500	35.7857	40.0714
		SD	6.9401	7.4106	8.1685	7.8200	SD	6.9650	7.0496	6.9643	7.0690
調査対象(N)			48	42	44	38	N	30	40	42	42

表3c 職業知識および進路成熟度の発達 (K中・K高一兵庫県郡部)

		男 子				女 子					
		中 1	中 3	高 1 (普通)	高 3 (普通)	中 1	中 3	高 1 (普通)	高 3 (普通)		
職業知識	1	M	5.0579	6.1074	6.9139	7.1867	M	5.0227	5.9352	6.7837	7.3499
		SD	2.2417	2.2592	1.8354	1.8759	SD	1.9941	2.0783	1.7954	1.6363
	2	M	6.6739	7.4958	7.5806	7.5774	M	7.0227	7.7625	8.1351	7.8499
		SD	2.2174	1.9204	2.0703	1.8963	SD	1.9789	1.5984	1.6213	1.3973
	合計	M	11.7318	13.6076	14.4946	14.7042	M	12.0454	13.6862	14.9189	15.2000
		SD	3.8495	3.6553	3.4753	3.1237	SD	3.3616	3.0302	2.7546	2.5416
進路成熟度	A	M	10.2753	10.6528	9.7804	11.0422	M	10.4015	10.8848	10.6446	11.3374
		SD	2.8710	3.5272	3.2473	3.4454	SD	3.0472	2.9603	3.1981	3.3613
	B	M	12.2878	14.3057	14.9569	15.3521	M	12.5833	13.6906	15.0135	15.4624
		SD	3.4978	2.6685	2.7314	2.8586	SD	2.9696	3.0531	2.7187	2.8237
	C	M	9.6159	9.2479	9.0430	10.6619	M	9.0378	9.0143	9.5810	10.9124
		SD	3.4793	3.5843	3.4545	3.8636	SD	3.3987	3.5258	3.0668	3.6269
	合計	M	32.1811	34.2384	33.7204	37.0563	M	32.0227	33.6405	35.2432	37.7125
		SD	6.8442	6.6225	6.9489	7.3021	SD	6.3835	7.1140	6.5198	6.9357
	調査対象(N)		138	130	93	71	N	132	153	74	80

表3d 中学生・高校生(普通科)のCDTの平均・標準偏差

		男 子				女 子					
		中 1	中 3	高 1	高 3	中 1	中 3	高 1	高 3		
職業知識	1	M	5.0658	6.4959	7.0502	7.2600	M	5.2995	6.1968	7.0972	7.5328
		SD	2.0336	2.0438	1.7632	1.883	SD	1.9229	2.0012	1.8001	1.4952
	2	M	6.5925	7.5483	7.7877	7.5066	M	6.8792	7.5643	7.7847	7.9670
		SD	2.0654	1.6648	1.7043	1.9655	SD	1.9781	1.6960	1.7956	1.2897
	計	M	11.6584	14.0443	14.8377	14.7666	M	12.1787	13.7551	14.8819	15.4342
		SD	3.5140	3.1434	3.0012	3.3434	SD	3.1808	3.0990	2.9592	2.4188
進路成熟度	A	M	9.8724	10.1370	10.0558	10.4333	M	9.6135	10.5518	10.1180	11.2302
		SD	3.2081	3.5962	3.4989	3.6192	SD	3.2771	3.2436	3.5541	3.3901
	B	M	12.2222	14.4556	15.0670	15.6466	M	12.0483	13.8879	15.1041	15.7828
		SD	3.4936	2.8080	3.1367	2.7836	SD	3.1619	2.9588	2.7981	2.6801
	C	M	9.4320	9.9153	9.4972	10.9066	M	9.6183	9.1991	10.0833	11.7894
		SD	3.4244	3.7915	3.6377	3.8528	SD	3.6201	3.6452	3.4550	3.8484
	計	M	31.5267	34.5080	34.6201	36.9866	M	31.2801	33.6390	35.3055	38.8684
		SD	7.2186	6.9159	7.6619	7.3084	SD	6.5014	7.3104	7.0683	7.0502
	人 員		243	248	179	150	N	207	241	144	152

図2-9 職業知識の発達(男女別・学校別比較)

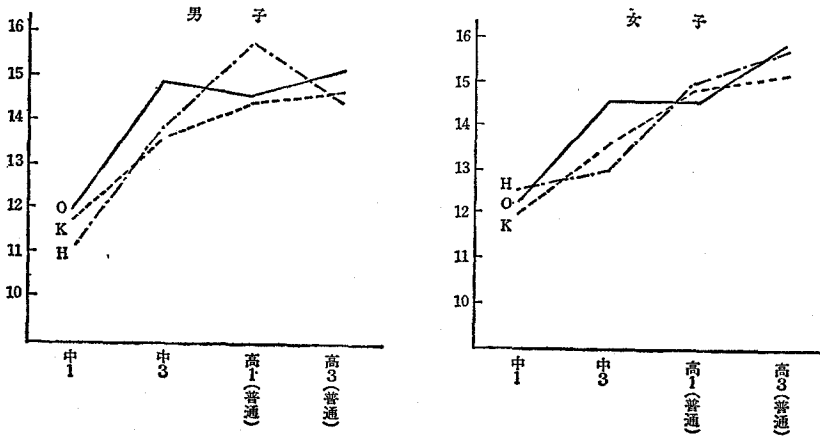
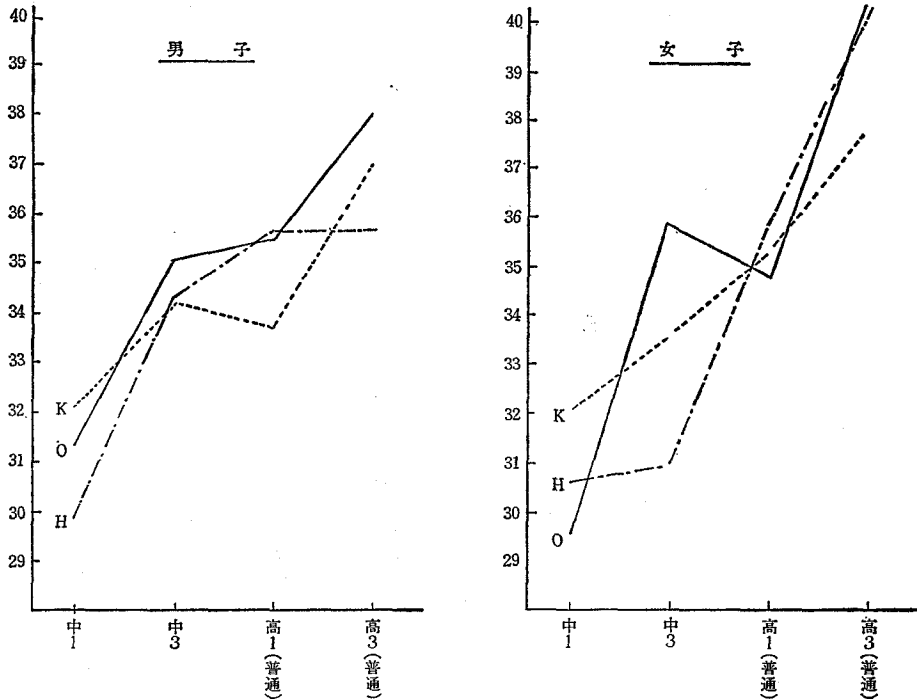


図2-6 進路成熟度の発達(男女別・学校別比較)



このように二つの尺度とも学年とともに上昇がみられ、かつ都市群、農村群で大きな差がみられないので、生徒の進路発達を地域にかかわらず測定しているものとみられる。

2) 指導による CDT 得点の変化(縦断的研究)

清水賢照の研究によれば³⁵⁾、8カ月間の指導により、職業知識と進路成熟のいずれもが実験学校において著しい増加を示したことが明らかにされている。すなわち勝山市H中学2年、

敦賀市K中学2年を対象として44年6月から45年2月の6ヶ月間に実験学校において(1)職業と人生, (2)職業のいろいろ, (3)職業と教育訓練, (4)自分を知ろう, (5)先輩のあゆみ, (6)自分の進路を考えようなどについて実験学級で指導を行ない, それと指導を行なわない普通学級とを比較した結果は進路成熟の変化は表4のようであった。職業知識についても採点法がやや異なるが同じ結果が示されている。しかし44年と46年の間に統制群の間に差はみられないことは, 進路発達が自然的な発達というよりも, つねに社会的な刺激に応じて発達するものであることが, この研究から明らかにされている。

表4 実験群と統制群の進路成熟度の1年後の比較

進路成熟	44年	45年
実験群	31.0	36.1
統制群	30.8	29.5

3. CDT と同種のテストとの相関

併存的妥当性としては CDT の下位尺度と他と同じ目的をもったテストとの相関をもとめることによって明らかにされる。藤本喜八の研究によれば³⁶⁾, 氏が現在改訂中のスーパーの CDI と, 筆者の CDT-1 の進路成熟尺度の自発性, 独立性, 計画性の下位得点, および総合点との間に表5にみられる相関が得られた。

表5 基準連関妥当性

CDI		職業レディネス・テスト					進路調査票 (CDT-1)			
		data	people	things	所要資格	職業特徴	自発性	独立性	計画性	成熟度
中 二 108名	A方向づけ	.141	-.036	-.164	.275	-.219	.411	.562	.514	.634
	B情報源	.111	-.010	-.087	.157	.054	.397	.236	.309	.368
	C選択決定	.268	-.168	-.051	.165	.288	.024	.161	.142	.137
	T総点	.147	-.007	-.121	.216	.124	.441	.363	.407	.489
高 二 120名	A方向づけ	.258	-.058	-.187	.228	.098	.458	.136	.499	.523
	B情報源	.141	.082	-.219	.086	.134	.308	.059	.288	.319
	C選択決定	.115	-.036	-.079	.052	-.049	.071	-.007	.079	.074
	T総点	.194	.048	-.235	.138	.134	.385	.087	.381	.412
合 計 228名	A方向づけ	.340	-.136	-.216	.388	.232	.421	.458	.529	.610
	B情報源	.148	.011	-.168	.144	.110	.348	.172	.305	.349
	C選択決定	.364	-.228	-.119	.315	.223	.057	.252	.174	.199
	T総点	.242	-.045	-.206	.250	.171	.408	.290	.413	.474

この表から明らかのようにスーパーの CDI のうち態度的側面を測定している(A)方向づけ, (B)情報源のいずれとも相関がみられるが, (C)選択決定は知的な問題解決であるので低い相関

がみられる。同時に行なわれたレディネステストとスーパーの CDI とはあまり相関が高くないのはそのテストの目的が異なるためとみられる。この点からみても CDI と CDT-2 はテスト形式が異なるにもかかわらず、中学生高校生の進路発達という側面を両者ともかなり正確に把握しているものと考えられる。

Ⅳ CDT-2 の下位テスト間の相関および他のテストとの相関

1 テスト内の相関

職業知識と進路成熟の各下位検査内には表6のような相関がみられた。職業知識と進路成熟はそれぞれ、.1から、.2くらいの相関しかみられず、それぞれ独立したテストであることが明らかである。しかし職業知識(1)と(2)また進路成熟度の(A)(B)(C)とその総点(T)との間には高い相関がみられる。

表6 Y中学3年生の職業知識・進路成熟度の相関係数(41年度資料)
(斜線の右上半は男子(M) 左下半は女子(F)の相関係数を示す。)

	1	2	3	4	5	6
職業知識 (1) 1	(M) (F)	+.51152 (***)	+.02461	+.30911 (**)	+.21392 (*)	+.22799 (*)
職業知識 (2) 2	+.42731 (***)		-.10544	+.23246 (**)	+.09402	+.08577
進路成熟度 (自発性) (A) 3	+.07150	+.18536 (*)		+.16980	+.27822 (**)	+.62468 (***)
(独立性) (B) 4	+.17105	+.21849 (**)	+.42919 (***)		+.46872 (***)	+.67173 ***
(計画性) (C) 5	+.11166	+.12774	+.49496 (***)	+.31401 (**)		+.79548 ***
(総点) (T) 6	+.13543	+.22807 (*)	+.79724 (***)	+.71274 (***)	+.77941 (***)	

() 中の* は有意性レベルを示す。

*** 0.1%の危険率で有意

** 1% "

* 5% "

2. 他のテストとの関係

(1) 性格検査との関係

武衛孝雄の研究によれば⁸⁷⁾、進路成熟度と矢田部ギルフォードの各下位尺度との関係を検討した結果、表7のような結果が得られた。「進路成熟度の高いものは全般的に劣等感が少なく、指導性などの点で優れているが、女子ではこれらの特性のほかに空想的、主観的傾向がみられ、また活動的で明朗であり、反省的態度がみられる。」としている。

(2) 知能、学力、学習興味、創造的、思考力、創造的態度と進路発達検査との関係⁸⁸⁾

以上の下位テストと進路発達検査との関係を明らかにするため、中学3年生の男子と女子を対象として、これらのテストを施行し、これらの各テストの下位テスト得点の相関行列を

表7 職業的成熟度高得点者ならびに低得点者群のYG各尺度における評点平均と両群間の差の有意性

		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
男子	高得点者群	9.0	9.4	7.1	9.3	8.5	8.3	11.9	12.2	11.6	8.9	10.8	12.8
	低得点者群	9.8	10.7	11.3	9.5	9.5	10.1	11.2	11.6	12.1	9.9	7.7	9.2
	両群間の差の有意性	—	—	t=2.15 p<.05	—	—	—	—	—	—	—	t=2.69 p<.01	t=2.95 p<.01
女子	高得点者群	11.2	11.8	10.4	10.2	11.3	9.7	12.3	13.2	12.1	8.6	10.8	12.8
	低得点者群	10.9	11.9	12.5	9.1	8.9	9.5	10.5	8.3	11.6	11.6	7.2	8.9
	両群間の差の有意性	—	—	t=2.25 p<.05	—	t=2.62 p<.02	—	t=2.03 p<.05	t=5.60 p<.01	—	t=2.98 p<.01	t=3.92 p<.01	t=4.38 p<.01

主軸法によって因子分析し、ヴァリマックス回転した結果、表8のような結果が得られた。

この結果からは男子では第Ⅰ因子は認知的能力、第Ⅱ因子は興味態度因子、第Ⅲ因子は創造的思考因子、第Ⅳ因子は自発性計画性因子と命名され、これ以後の因子は解釈が困難であった。職業知識は第Ⅰ因子に対する因子負荷量が高く、知的因子で説明されるが、進路成熟度の方は創造的態度と関係がみられ、人格の自発的な側面と解釈される。女子の場合もほぼ同様な因子がみられ、第Ⅰ因子は認知的能力、第Ⅱ因子は興味態度因子、第Ⅲ因子は自発的計画性、第Ⅳ因子は創造的思考力の因子と解釈され、因子の抽出される順序に相違がみられる以外は男子とはほぼ同様な解釈が与えられる。

(3) 知能・学力・職業興味・職業適性と進路成熟度との関係⁸⁹⁾

このようにみえてくると進路発達検査のなかでも進路成熟度尺度はこれまでのテストとは異なる独特の側面を測定していることが次第に明らかになってきた。そこでこれまで職業適性のために使用される諸検査のなかで、この進路成熟尺度がいかなる位置づけにあるかを明らかにするために進路指導に今日用いられるすべてのテストを大阪市内の中学3年生男子40名、女子40名計80名に施行した。男女別の因子構造に差はみられないことは前記の研究で明らかなので、ここでは男女ともにプールして各テスト間の得点の相関行列をもとめ、主軸法によって因子分析を行ない、バリマックス回転を行なった。因子は第7因子までを求めたが、解釈が明確な第3因子までを表9に示した。すなわち得られた3つの各変量の間の相関係数を示したのであるが、ここから24の下位テストは比較的単純な構造で把握することができる。

さらにこれをよりわかりやすく理解するためにそれぞれ直交する因子間の関係を示したのが図3である。すなわちX軸に第Ⅰ因子、Y軸に第Ⅱ因子で示して、それぞれの構造ベクトルの値によって、下位テストの位置を示した。なお第Ⅲ因子はX軸とY軸が交叉するO点の平面に直交するZ軸が想定されるが、ここでは図示していない。

さて、この表9と図3から第Ⅰ因子を解釈すると、各下位テストのうち、学力(.8725)、

表8 31のテストのための因子負荷量

			男 子				女 子				
			1	2	3	4	1	2	3	4	
知能	IQSS	1	0.7505	0.0992	0.1632	-0.2307	0.7872	0.2130	0.0036	0.0590	
学 力 テ ス ト	国語	TKOK	2	0.8190	0.1055	0.0832	-0.0771	0.8278	-0.0627	-0.0861	0.0953
	社会	TSHA	3	0.8396	0.1496	0.0983	0.0531	0.7793	-0.0802	-0.0303	0.0971
	数学	TSUG	4	0.8792	0.0918	0.1042	-0.1087	0.8576	0.1096	0.1052	-0.0094
	理科	TRIK	5	0.8463	0.1155	0.1683	-0.0113	0.7835	0.0568	0.0100	0.1524
	英語	TEIG	6	0.8609	0.1393	-0.0814	-0.1144	0.7720	0.0497	-0.1182	-0.1202
	音楽	TONG	7	0.7942	-0.0038	0.0614	-0.0590	0.7501	0.0984	0.1302	-0.0299
	美術	TBIJ	8	0.6552	0.0706	0.0205	0.0276	0.5360	0.0905	-0.0079	0.3759
	保体	THOT	9	0.8110	0.0291	0.1173	0.0192	0.8039	-0.0293	0.1021	0.0911
	技家	TGIK	10	0.7997	0.0250	0.1702	0.0504	0.7737	-0.0180	0.0924	0.1880
	興 味 検 査	国語	KKOK	11	0.0783	0.8645	-0.0209	-0.1931	0.1747	0.1568	0.0671
社会		KSHA	12	0.1912	0.8567	0.0512	-0.0634	0.1036	0.0904	0.1090	0.0397
英語		KEIG	13	0.2635	0.7131	-0.0666	-0.1745	0.2069	0.1636	0.0439	-0.1805
数学		KSUG	14	0.4281	0.4792	-0.0492	-0.4178	0.1133	0.5264	0.1059	-0.0142
理科		KRIK	15	0.1679	0.6705	0.0147	-0.0217	-0.0461	0.3374	0.0593	-0.0958
音楽		KONG	16	0.1003	0.6280	0.0902	-0.1891	0.0243	0.2678	0.2431	0.2335
美術		KBIJ	17	-0.0109	0.5476	0.0204	-0.1452	0.1190	0.7640	-0.0162	0.1742
技術		KGIJ	18	0.0358	0.2583	0.0515	-0.1607	0.0521	0.4843	-0.0810	0.0080
家庭		KKAT	19	-0.0060	0.7323	0.0104	-0.1041	0.0087	0.7751	-0.0172	0.2428
保健		KHOK	20	0.0695	0.8298	0.0587	0.0383	-0.0464	0.3119	0.2460	0.0636
体育		KTAI	21	-0.0060	0.6394	0.1424	-0.1276	0.0183	0.6815	0.1041	-0.1876
創態	CRAT	22	0.1095	0.3042	-0.0060	-0.7198	0.0746	0.2705	0.2840	-0.1541	
創 造 性	SOT1	23	0.4775	0.0724	0.1245	0.2026	0.4958	-0.0539	-0.1543	0.2070	
	SOT2	24	0.1435	0.1204	0.4979	-0.2286	0.1823	0.1471	0.0561	0.7752	
	SOT3	25	0.2359	0.0075	0.6662	-0.0367	0.3725	0.0617	0.0626	0.4596	
	SOT4	26	0.1415	0.0308	0.8016	0.0388	0.1479	0.1012	0.0595	0.2188	
進 路 成 熟 度	SH-1	27	0.2932	0.0469	0.1450	-0.0547	0.3271	-0.1369	-0.0054	0.2935	
	SH-2	28	0.3238	0.1306	0.2040	-0.0815	0.3894	-0.0433	-0.0701	0.1576	
	SH-A	29	-0.0322	0.1666	0.0796	-0.3145	-0.0272	0.2133	0.7319	0.2307	
	SH-B	30	0.2814	0.1332	0.5268	-0.3669	0.1266	0.0895	0.2137	0.0259	
	SH-C	31	0.0097	0.1093	0.1111	-0.7692	0.1250	-0.0966	0.8065	-0.1028	

知能 (.8543), G知能 (.8558), V言語 (.8249), N数理 (.8545), など認知的な側面を測定する下位テストのベクトルが大であるから, 第Ⅰ因子は認知的因子と命名することができる。

第Ⅱ因子は両極因子を示しており, プラスの方向に研究 (.8030), 機械 (.6876), 計算 (.6704), 他方, マイナスに言語 (-.8649), 対人 (-.8087), のベクトルを示している。これらはいずれも興味を測定する下位テストであるから, 第Ⅱ因子は理科的計算的な極と,

表9 24のテストのための因子負荷量

	I	II	III
1 学力	.8725	.0104	.1121
2 知能	.8543	.1300	.1303
3 計画	.1577	-.1382	.6208
4 自発	.0497	.0569	.4858
5 独立	.3003	-.1079	.4865
6 進路成熟総点	.2097	-.0635	.8170
7 対人	.1737	-.8087	-.0620
8 自然	-.0141	.2813	-.4281
9 機械	-.2065	.6876	.1952
10 実業	.0953	-.5052	-.1647
11 芸能	-.0981	-.4861	.4473
12 研究	.0563	.8030	.1126
13 言語	.1428	-.8649	-.0488
14 技能	-.1612	.2733	.6562
15 計算	.1007	.6704	.0722
16 知能G	.8558	-.0729	.0314
17 言語V	.8249	-.1116	.0866
18 数理N	.8545	.0113	-.0816
19 書記的知覚Q	.6653	-.1305	-.1328
20 空間判断力S	.6261	.2599	-.0472
21 形態知覚P	.5177	.2790	-.1659
22 運動共応K	.5134	.1700	-.2037
23 指先の器用さF	.4115	.1499	-.3078
24 手腕の器用さM	.3977	.1419	-.0994
固 有 値	5.6416	3.9219	2.6676

対人言語的な極の興味を示す両極因子であると解釈される。なお、この理科・計算の極から、対人言語の極の軸上を、技能、自然、芸能、実業の興味領域が位置している。

ここでもう一つの興味のあるのが、一般職業適性検査の下位テストの得点が、認知的因子のみでなく、興味にも関係していることである。すなわち、理科的、機械的な適性を示すS（空間判断力）やP（形態知覚）は興味の軸でいえば理科的計算的な極に片寄っているし、Q（書記的知覚）やV（言語）は対人的言語的な興味の極に片寄っている。ここから一般職業適性検査は認知的能力を中心に測定してはいるが、しかしその問題内容からみて職業興味とも関係があるといえる。

さらに進路成熟度はこれらいずれかの軸と無関係な、交叉する中心附近に分布しており第III因子の構造ベクトルにおいて、進路成熟総点（.8170）、計画（.6208）、自発（.4858）、独立（.4865）、技能（.6562）、というように他のそれとは独立した因子を示していると思われる。

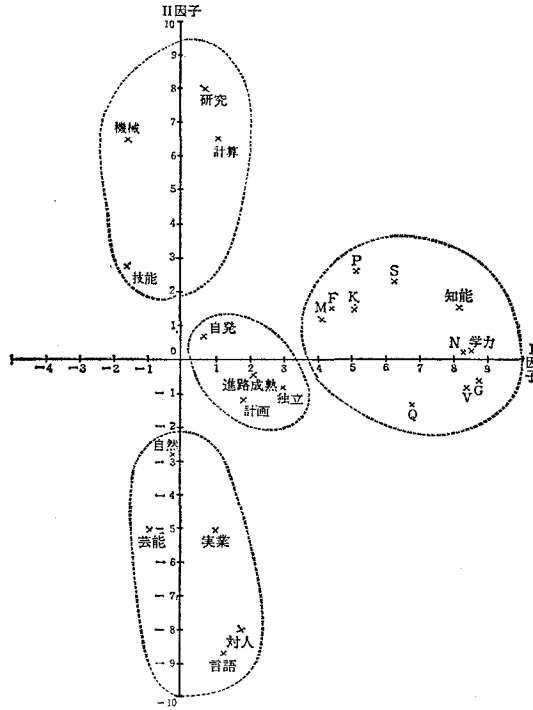


図3 第1因子と第II因子の軸上に示される
下位テストの位置

ここからこの因子を進路成熟因子と命名することができる。

以上の因子の他に、第V因子でも比較的独立したものとして、F（指先の器用さ）の.5226（手腕の器用さ）の.6175 という器用さに関する因子が見出されている。

V CDT-2 の標準化

本テストは41年において、1344名、42年において1278名に施行されたが、また48年から49年に1461名の生徒に施行された。その間、筆者および他の研究者によって、4千人以上の対象に実施されている。しかし、標準化にあたっては、比較的最近調査されたもので、かつ同じ地域の中学生、高校生を調査したものであることを考慮して、48年から49年の両年にわたって調査された大阪、兵庫、山口の三府県同一学校または同一学区の中学生および高校生のサンプルを中心にして行なった⁴⁰⁾。これら三つの地域のデータをプールして職業知識、進路成熟度の平均と標準偏差をもとめたのが、前掲の表3-d である。この表をもとに5段階の評価表を作成したのが表10である。このテストの信頼度からみてあまりこまかな標準点への換算よりは、評価に使いやすい5段階表示の方がのぞましいと考えたからである。これによ

って、それぞれの該当年齢の進路発達の評価を行なうことが可能となるものと考えられる。

表10 段階点換算表

テスト	段階	男 子				女 子			
		中 1	中 3	高 1	高 3	中 1	中 3	高 1	高 3
職業 知識	5	17以上	19以上	20以上	20以上	17以上	19以上	20以上	20以上
	4	16~14	18~16	19~17	19~17	16~14	18~16	19~17	19~17
	3	13~10	15~13	16~14	16~14	13~11	15~13	16~14	16~15
	2	9~7	12~10	13~11	13~10	10~8	12~10	13~11	14~12
	1	6以下~	9以下~	10以下~	9以下~	7以下~	9以下~	10以下~	11以下~
進路 成熟度	5	43以上	45以上	47以上	48以上	42以上	45以上	46以上~	50以上
	4	42~36	44~38	46~39	47~41	41~35	44~38	45~39	49~43
	3	35~28	37~32	38~31	40~34	34~29	37~30	38~32	42~36
	2	27~21	31~25	30~24	33~27	28~22	29~23	31~25	35~29
	1	20以下~	24以下~	23以下~	26以下~	22以下~	22以下~	24以下	28以下~

第3章 進路指導における進路発達検査の意義と応用

1. 進路指導における進路発達検査の意義

本年(1975年)の9月1日から5日まで開かれた第8回国際進路指導セミナーに出席された立教大学藤本喜八教授は3つの基調報告の概要を紹介しているが、そのうちスーパー博士の報告について次のようにのべている⁴¹⁾。

「スーパー教授は、特性因子論的な『仕事と人間のつき合わせ』方式のガイダンスが40年の長い間職業指導界をリードしてきたのに対して、発達のアプローチが強調されるようになったのが約20年前であり、その間にもっぱら理論の構成に終始していたといわねばならずその実践場面への移行が長く求められてきた。スーパー教授は、いまやそれにこたえるべき時期にきた、として『職業指導—それは激変する社会における探索と次々に発現する意志決定のプロセスである』の題のもとに、キャリア決定の樹(Career decision tree)、生活・キャリアの虹(Life career rainbow)という2つのモデルを採用して、進路選択のプロセスを、キャリア教育とキャリア・カウンセリングにおいて、いかに適用し、いかに実現して行くべきかを論じた』そして藤本教授はさらにこの実践的展開にスーパー博士の作成にかかわるCareer Development Inventory (CDI : 進路に関する意謝の調査票)の意義を強調しておられる。

このような動向はわが国においても次第に顕著になり、従来は多くの学者や研究者の間では問題にされなかった「職業的発達」が進路指導を担当している現職の教師の参考資料とさ

れている「進路指導」誌上において、中学生・高校生の職業的発達やその評価などが特集として出され、これらの問題が論ぜられるようになった。そしてより公的な出版物としては、文部省の「進路指導の手引」においても大幅にこれらの考えがとり入れられている。たとえば1963（昭和38年）に出版された「中学校・高等学校進路指導の手びき—進路指導主事編」で「職業的発達の評価」が論ぜられ、また1974年に出版された文部省中学校・高等学校の進路指導の手引—中学校学級担任編」においては、その全体の構成として、進路発達の考えを基調としながら定義の解釈に発達の見方を取り入れ、また年間指導計画のような学年発達に則した指導法をあげている。そして目次の上にも明確に「学級担任の教師が行なう、個々の生徒の職業的発達の評価について説明してください」という質問が第7節「学級担任による進路指導の評価」の一項目としてあげられている。

さらに本年（1975年）に出版された「高等学校ホーム・ルーム担任編」ではさらにその傾向は顕著で、全体の構成はもとよりのこと、目次のなかにも前述のような「職業的発達の評価」の項のほかにも、「高校生の職業的発達をどのように考えたらよいでしょうか。」という質問項目さえ設けられている。さらにこれに加えて、用語解説の項目として職業的発達、自己概念、自己実現、職業生活の諸段階と生活周期、キャリア・エデュケーションなどの用語がとりあげられ、解説されたことは教育現場への職業的発達理論の浸透と、その実践への大きな跳躍台となるものと考えられる。わが国にはじめて職業的発達理論が紹介された20年後に、これらの理論が漸やく実践化されつつあることを示すよい例であろう。

学校進路指導は元来、生徒の発達とともに実践されるものであるから、このような考え方は比較的なじみ易いのであるが、職業安定行政を中心に行われる労働省関係の職業指導では、やはり従来通りの一回きりの就職あっせんで、かつ適性中心の見方になりやすいのにもかかわらず、最近になって漸く変化がみえはじめ、前述したとおりの職業レディネス・テストの開発となったのである。すなわち、職業研究所編の職業レディネス・テスト活用の指針において、開発研究の目的と背景として、次のようなことがのべられている⁴²⁾。

「すなわち、大数的に特定の職業あるいは職業群で成功している人々の特性のタイプを分析し、その特性タイプを持った個人を、その特定職業あるいは職業群に適していると判定する。換言すれば、一定の特性タイプ—これは、人間の—側面でしかない—に対応する特定の職業あるいは職業群を、大数的な考察のうえにたって設定し、一定の特性タイプを持った個人は、その職業ないし職業群に適しており、そうすることが本人にとって最も幸福な道であるという考えに立脚しているといえよう。このような見解に立てば、心理学的テストはその予測的機能にウェイトをおいた位置づけが、進路指導の過程のなかで与えられることとなる。従来の心理学的諸テストにおいても、その乱用・誤用をいましめ、テスト結果の総合的な解釈の必要を説きながら、具体的な結果の活用方法の解説においては、テストの信頼性・

妥当性を強調するあまりにか、テストの予測的価値を極めて意識した解説が行なわれているというのは果していい過ぎであろうか。

われわれは、以上のような、古典的な、特性—因子論的な立場を全面的に否定するものではないが、職業選択現象を長期にわたる、発達の連続過程と解釈し、職業選択を自己概念の職業的表現と説くスーパーらの見解により多くの示唆を感じるものである。このことは、生徒の自己理解、自己概念の深化と職業的意義づけとを、進路指導の主要な目標とせざるをえないし、心理学的テストもその脈絡のなかに位置づけをしなければならないことを意味する。すなわち、職業レディネス・テストは、『生徒個人が彼の職業的自己概念をチェックし、自分で考え、方向性を探索する』ための素材となるものでなければならないし、今後、開発されるべき職業レディネス・テストにおける『被検者は、たんに研究され、診断され、選別 (分類) される対象とされるのではなく、被検者の“主観”が大切にされ、実施者とのコミュニケーション場面が重視される』ものでなければならないと考えるのである。検査者と被検者 (生徒) がその意志、希望、考えといったものを相互に交換するための、あるいはコミュニケーションを容易にさせるための媒体となるべきデータが必要となろうし、職業レディネス・テストはそのような要請に応えるものでなければならない、と考えるのである。』

論者の意見を正しく紹介するために、引用文としてはあまり長すぎているが、この言葉のはしはしに現在の進路指導における適性検査の意味がまさしく問われているといわねばならない。

さきに筆者が開発した CDT-2 とその他の適性検査との因子構造の図を示し、第1因子として認知的因子、第2因子として興味因子が見出された。従来の適性検査はこの2次元において示される。そしてそれはローの2次元で示される職業の世界との対応を考えると、認知因子は職業水準に、興味因子は職業活動と関係する。このような職業の世界に対して、人間のより主体的な側面を明らかにしようとする試みがこれまでつづけられたのがさまざまな進路発達の諸テストの開発となったのである。筆者はすでに4年前にこの進路適性の発想の転換を「コペルニクス的転換」として論じたことがある⁴⁸⁾。

「このことは従来の特性因子論が、どちらかといえば産業界や企業側に立って、その側面からの選抜方法に重点がおかれていたのに対し、自己概念中心の職業指導論では、まず青少年の職業的発達に則して、青少年のうちにめざめつつある自己認識の上に立って、未来を展望し、自己を実現する場としての職業世界を明らかにするという、いわばコペルニクス的展開が、今日の進路指導にもとめられているわけで、このような理念の実現のための方法として個人理解や個人資料の活用が行なわれねばならないのである。」

このような意見は当時の人々にはあまり理解されなかったかもしれないが、事態はようやく筆者が論じたとおりに展開しており、個人の発達の側面を重視しつつ個人が自分の適性を

いかにとらえ、その認識のもとで自己実現をはるかという方向が強調されつつある。それではこれらの進路発達の特検査はどのように活用されたらよいか、次にクライツらの説を参考にしつつ考察したい。

Ⅱ 進路発達検査の活用

この種のテストとしてはもっとも早く開発され、かつ現代の進路発達理論の実践をつねに新しい考え方から展開しつつあるクライツの作成して進路成熟目録 (CMI) の実施の手引において、5つの分野についてその活用を論じている⁴⁴⁾。

(1) 進路発達における研究調査

進路発達に関してなされているさまざまな仮説、すなわちすでにのべたように「職業的選択は個人の発達とともに成熟する」(クライツ)とか、「職業的成熟は職業的適応と関係がある」(スーパ)などの検討にこのテストが用いられる。また進路発達と他の発達側面との関連もこれで明らかにされるであろう。

(2) 進路未成熟 (Career immaturity) の発見

従来の進路発達の特研究で、中学生や高校生の段階における進路決定ができないものの割合などが示されているが、個々の生徒の未熟さの程度は十分に測定できなかった。進路指導計画にあたって、どの程度の進路発達段階にあるかということと、個々の進路未熟生徒の発見と、これら生徒への援助がはかられるべきであろう。

(3) カリキュラム上、およびガイダンス上の必要性の評価

ここでは個々の生徒でなく、学校全体として、当該学校の生徒の進路発達の状態を評価し、そのためにカリキュラム編成上、またガイダンスの技術上の問題が検討される。今日では、進路指導 (Career guidance) はたんに生徒の進路問題を解決する対症的方法ではなく、生徒の進路発達を促進し増大させるための刺激となるような条件を整備することが強調されている。学校はこのような進路指導の積極的な目的を遂行するためにカリキュラムやガイダンスの設計計画を行なう必要がある。

(4) キャリア教育 (Career Education) の評価

「キャリア教育」については文部省の「進路指導の手引」(中学校学級担任編)において、次のように解説している。

「キャリア教育とは1971年の初頭、アメリカ連邦教育局が発表した教育重点施策の一つで、そのねらいは、小学校から高校までのすべての児童、生徒に対し、知的教育と職業、技能的教育を融合的に実施し、一人一人の青少年が、少なくとも高卒後自分に最もふさわしい進路につき、自己実現ができるような知識・技能・態度を、学校の全教育活動を通して十二分に育成しよう、という教育運動のことである。」と定義され、ミネソタ大学の研究グループの例

が紹介されているが、同時にこの用語の解説者である立正女子大学 仙崎武教授は「進路指導」誌をはじめ多くの著者や論文でキャリア教育を紹介しておられる⁴⁵⁾。

ここでは1971年の合衆国教育局のキャリア・エデュケーションの公文書からその目的について引用する⁴⁶⁾。

「生徒が仕事を追求するか、さらに教育をうけるか、または双方をくみ合せたものをえらぶかなどについて、訓練され用意されねばならない基本的な意思決定の観点をキャリア教育は認識する。

子どもが学校段階を通して移動するにつれて、仕事の世界への親しみを示し、学校を卒業するときに有意義な就職が得られるのに必要な知識を獲得する。

キャリア教育は大幅な職業選択法を生徒の前に示し、仕事に対する積極的な態度を發展させるのを助力する。」

クライツはこれらの論述で強調されていることと同様なことが、丁度進路発達理論で仮定されているプロセスと並行していることをみとめ、このキャリア教育の実践と評価にあたって、カリフォルニア、デラウエア、メリランド、ミシガンなどの各州において彼の開発したCMIが活用されていることをのべている。

(5) 進路相談 (Career counseling) におけるテスト施行

すでに米国ではスーパーの前の引用文でもみられるような Vocational counseling にかわって Carrer counseling という用語が用いられているが、クライツも CMI の手引ではこの用語を用いている。わが国では進路相談という用語は、「職業指導」から「進路指導」へと公式用語が変えられた昭和33年の「中学校学習指導要領」の改訂のとき以来、20年を経ているのであるが、米国でも最近漸やくキャリア・カウンセリングという用語が定着しているようである。

クライツは進路相談は個人であれ、集団であれ、キャリアに対する態度の成熟を増大させるものであるという仮説と、この仮説の研究調査の結果をあげている。そしてこの CMI は生徒の進路成熟がどの点において未熟であるかを発見するのに役立ち、そのような未熟な側面をカウンセリングによって成熟させることが期待されている。

以上のようなクライツのあげた諸分野は、「キャリア教育」の項をのぞけばほぼ全面的にわが国の進路指導の分野にも適用されると考えられるが、わが国では進路指導の評価という分野でとくに「職業的発達」の問題がとりあげられている。

広井は進路指導の評価を(1)追跡補導による評価、(2)運営管理の評価、(3)生徒の発達の評価の3つの側面にわけて考察している⁴⁷⁾。

第一は「追跡補導による評価」である。それは適性検査の予測的妥当性の基準としてもしばしば用いられたのであるが、この方法には次のようないくつかの困難があることが指摘さ

れている。①進路指導の効果があらわれるまで、卒業後かなりの時日を要し、現在の進路指導には役立たない、あるいは行なわれたとしても状況が変わってしまい古臭いデータになってしまう。②このように長年月かかると進路指導の成果以外のさまざまな要因が適応や成功に関連して介入してくる。③かりに卒業生の適応状況がとらえられても、それは主観的、包括的であるため数量化が困難である。

このような理由から最近ではむしろ、中学や高校の進路指導の運営管理的な側面が重視され、これについては、仙崎が「進路指導主事のための自己評定尺度」を作成している。

他方、生徒の個人的側面は中学や高校の3年間の進路指導の成果が明らかにされるような評定法やテスト法の開発が望まれているわけで、文部省の「進路指導の手引」が「中学校学級担任編」「高等学校ホーム・ルーム担任編」においてとりあげているのはこの問題である。このような、職業的発達の評価の観点として(ア)自己の能力・適性等、自己の総合的理解を、現実的な条件にもとづいて吟味、修正しているか。(イ)将来の自分の生き方に自分で責任をもつことが分かり、最も望ましい生き方を十分に検討しているか。(ウ)暫定的な進路計画に検討を加え、よりよい計画を立案しているか。(エ)従来の啓発的経験や探索的活動の成果を受けて、仕事の世界への知識・理解が十分にあるか。(オ)教育訓練や産業・職業についての資料・情報についての知識・理解が十分にあるか。(カ)自己の客観化ができ、意志決定の過程が明確に理解できているか。(キ)自立の精神が身につく、進路計画の実現に努める意欲や態度が確立しているか、などの観点があげられているが、これらについての教師の評定の主観性を補うものとして、CAT-2 やその他の進路発達を評価するテストが活用されるであろう⁴⁸⁾。職業的発達の評価のほかにも、中学生・高校生の職業的発達の研究やさらにキャリア教育の導入を将来考慮しなければならない事態において、ますます、進路発達の評価と測定の必要性は高まっている。

かえりみて、1909年にパーソンのChoosing a Vocationにおいて特性因子的な考えの萌芽がみられて以来、1920年代の「精神測定運動」(Mental measurement movement)の時代を経て、1947年の一般職業適性バッテリー(GATB)の完成において特性因子説は最高潮に達したといわれる。ところがまさにその3年後の1950年に、ホボックは全米職業指導協会の会長演説のなかで次のように説いているのである。

「この(特性因子説)プログラムは膨大であったし、いまもなおそうである。が、その基礎は崩壊し始めている。戦争中に、カウンセリングや精神療法の出版で始まり、非指示的あるいは来談者中心療法として多方面に知られているものが、いまは臨床カウンセリングにとって絶対必要な予備行為としてのテストや診断の全概念の基礎にある基本的な仮説に挑戦している。」⁴⁹⁾

そしてその翌年の1951年には職業的発達理論にもとづく「職業指導の再定義」がスーパー

によって提唱され、20世紀の後半をリードする新しい理念が打ち出された。その後、四分の一世紀を経た今日米国においてはこの職業的発達理論の実践のためのクライツの CMI やスーパーの CDI が完成されたが、これらの諸テストによる進路発達の研究は、再び従来の職業的発達理論を乗り越える新しい理論の展開を促すものと考えられる。そしてその理論は21世紀の進路指導の実践につながるものであるに違いない。かかる意味において、筆者が開発した進路発達検査 (CDT-2) も新しい理論を創造するための進路発達研究にいくばくかの貢献をなしうるものと考えられる。

- (1) Super, D. E. Vocational development, 1957, Teachers College, Columbia Univ., 1957.
- (2) Tiedman, D.V. & O'hara, R. P. Career development: choice and adjustment. College Entrance Examination Board, 1963.
- (3) Peters, H. J. & Hansen, J. C. Vocational guidance and career development. Macmillan, 1966.
- (4) Krohl, A. M. et al. Career development: Growth and crisis. John Wiley & Sons., 1970.
- (5) Roth, R.M., Hershenson, D.B. & Hilliard, T. The psychology of vocational development. Allyn and Bacon, 1970.
- (6) Crites, J. Career Maturity Inventory (CMI); Theory & research handbook. McGraw-Hill, 1973.
- (7) 藤本喜八「職業相談の基礎としての職業経歴の類型」, 職業指導, 1955年2月号
- (8) 増田幸一「スーパーにおける職業概念の発展」, 教育心理学研究, 4巻(1957年), 41~53
- (9) Doll, E.A. The measurement of social competence. Educational Test Bureau, 1953.
- (10) Overstreet, P. Vocational development, in "Jersild, A. T. The psychology of adolescence." Macmillan, 1957.
- (11) Beilin, H. The application of general development principles to the vocational area. J. Counsel. Psychology, Vol.2 (1955), No.1, 53-57
- (12) Jersild, A. T. Child development and the curriculum. Teachers College, Bureau of Publication, 1946.
- (13) 中西信男「青年と職業」沢田慶輔編, 青年心理学 東大出版会 1966年
- (14) 中西信男「青年と職業観の発達」, 永丘智郎編 労働青年心理学 朝倉書店 1968年
- (15) 中西信男, 武衛孝雄「青少年の職業的発達の諸相」増田幸一監修 広井・中西・行田・堀内共編 実践進路指導講座 第1巻 進路指導の本質 実業之日本社 1970年
- (16) Mussen, P.H. Early socialization: learning and identification, in "Mandler, G. et al. (eds) New directions in psychology III." Holt, Rinehart & Winston, 1967.
- (17) Weinart, F. E. Schule und Beruf als institutionelle Sozialisationsbedingungen, in "Gottschalt, K. (ed) Handbuch der Psychologie." 7 Bänden, Sozial psychologie, 1972, Verlag für Psychologie.
- (18) Moore, W. E. Occupational socialization, in "Goslin, D. (ed) Handbook of socialization." Rand McNally, 1969.
- (19) 新井真人「職業的社会化」日本教育社会学(編) 教育社会学の展開, 22~29. 東洋館出版社 1972年
- (20) 橋本昭治「職業的社会化」斉藤・菊地共編 社会化の心理学 川島書店 1974年
- (21) Hewer, V. H. What the theories of vocational choice mean to a counselor? J. Counsel. Psychology, Vol.10 (1963), 118-125.
- (22) スーパー, D. E. 「職業的発達の理論と研究」 進路指導 1969年6月号
- (23) Super, D.E. The psychology of career. Harper, 1957.
- (24) Super, D.E. The dimension and measurement of vocational maturity, Bulletin de L'association Internationale de Psychologie Appliquee, No. 2, 1955(4).
- (25) Crites, J. CMI Handbook. (前出)
- (26) Gribbons, W.D. & Lohnes, P.R. Validation of vocational interview scales. J. Counsel. Psycho-

- logy, 11(1964), 20-26.
- (27) Crites, J. Career Maturity Inventory, manual for administration. McGraw-Hill, 1973.
- (28) Crites, J. A model for the measurement of vocational maturity. J. Counsel. Psychology, 1961, 8, 255-259.
- (29) 中西信男「進路発達検査の研究—進路発達検査試案 (CDT-1) の作成と項目分析」 職業科学, 近畿大学職業科学研究所紀要 6号 71-78 (1967年4月)
- (30) 職業研究所編 職業レディネス・テスト活用の指針 1974年 雇用問題研究会
- (31) 田中正吾編 中等教育段階における進路発達の研究 文部省 昭和40~41年試験研究—中等段階における進路指導の研究—1967年 (プリント)
- (32) Rosenberg, M. Occupations and values. The Free Press, 1957.
- (33) Ammons, R. B. et al. Vocational Apperception Test. Psychological Test Specialist, 1949.
- (34) 中西信男 「進路発達検査の研究」 職業科学 6号, 1967年 (前出)
- (35) 清水賢照 中学生における進路知識と成熟の発達の変容 進路指導 44巻 (1971) 26~37.
- (36) 小松信重・水谷統夫・藤本喜八他 文部省教育研究開発に関する調査研究 昭和48年度報告書「生徒の特性の分化の時期と中・高を通ずる観察・指導の充実強化について」(代表者・小松信重) (プリント)
- (37) 武衛孝雄「職業的成熟と性格」 進路指導 45巻 (1972年) 47~51.
- (38) 中西信男 広井甫・松浦宏編 生徒の特性分化の時期と, 中高を通ずる観察指導の充実強化に関する研究—中学校・高等学校における進路形成要因の発達と指導 (文部省昭和48年度教育研究開発に関する調査研究) 1974年 (プリント)
- (39) 中西信男・高橋敏「観察指導における適性予測の縦断的研究」 中西・広井・松浦共編 生徒の特性分化の時期と, 中高を通ずる観察指導の充実強化に関する研究 (文部省47年度, 教育研究開発に関する調査研究報告書) 1973年 (プリント)
- (40) 中西信男・広井甫・松浦宏・水野正憲 生徒の特性分化の時期と, 中高を通ずる観察指導の充実強化に関する研究—中・高一貫私立校と公立中・高校生徒の進路意識の比較 (文部省昭和49年度教育研究開発に関する調査研究報告書) 1975年 (プリント)
- (41) 藤本喜八「IAEV 第8回国際進路指導セミナー報告」 キャリア・ガイダンス 1975年 11月号63~69
- (42) 職業研究所編 職業レディネス・テスト活用の指針 1954年雇用問題研究会
- (43) 中西信男 「進路指導における個人資料の活用」 進路指導 44巻 (1971年) 6月号 2-6.
- (44) Crites, J. CMI: Administration and use manual. McGraw-Hill, 1973.
- (45) 仙崎武「キャリア・エデュケーション・その後」 進路指導 48巻 (1975年) 第4号~12号連載
- (46) U. S. Office of Education. Career education. Washington, D. C., Government Printing Office, 1971.
- (47) 広井甫「教職のための職業指導」 (上・下) 進路指導シリーズ 36 日本職業指導協会 1975年
- (48) 中西信男「生徒の職業的発達の評価」 進路指導 47巻 (1974年) 3月号 13~18.
- (49) 中西信男「中学生・高校生の職業的発達」 進路指導 48巻 (1975年) 4月号 16~20.
- (50) ミラー, C.H. (仙崎武訳) 「進路指導の歴史と展望」 (ボロウ, H.編 新時代のキャリア・ガイダンス) キャリア・ガイダンス, 1975年 1月号 109~136.

進路調査票 CDT-2 (男子用)

著者 中西信男 (不許複製) 1975年

1. 学校名()	2. 氏名()	3. 年令()	4. 学年()
5. 府県名()		6. 都市・農村(イ都心 ロ郊外 ハ農村 ニ山村 ホ漁村)	

I あなたは学校を卒業したのちにどのような計画をもっていますか(1つだけに○をつけて下さい)。

- (1) 上級学校に進学したいと思っており、父兄も賛成している。
- (2) 上級学校に進学したいと思っているが、父兄は反対している。
- (3) 就職したいと思っており、父兄も賛成している。
- (4) 就職したいと思っているが、父兄は反対している。
- (5) 家庭にいておけいこ(洋裁、お花)をしたり家事をしたいと思っており、父兄も賛成している。
- (6) 家庭にいておけいこをしたり家事をしたいと思っているが、父兄は反対している。
- (7) 将来のことは考えたこともないし、まだきまっていない。
- (8) その他(くわしく書いて下さい。自分の家の職業をつぐなど。)

II 次のような職業について、なりたいか、なりたくないかを○でかこんで下さい。すべての職業について答えて下さい。

	1. 全くなりたくない	2. なりたくない	3. どちらともいえない	4. なりたい	5. 非常になりたい
1. 販売員(セールスマン・店員)	1	2	3	4	5
2. 社会事業家(ケース・ワーカー)	1	2	3	4	5
3. ジャーナリスト(記者・アナウンサー・プロデューサー)	1	2	3	4	5
4. 芸術家(作家・画家・音楽家)	1	2	3	4	5
5. 芸能人(俳優・歌手・テレビタレント)	1	2	3	4	5
6. 事務員(銀行員・商社員・公務員)	1	2	3	4	5
7. 科学技術者(研究・設計)	1	2	3	4	5
8. 先生(小・中・高校)	1	2	3	4	5
9. 工場技能員(機械組立など)	1	2	3	4	5
10. 司法官(判事・検事・弁護士)	1	2	3	4	5
11. 医療(医師・看護・検査)	1	2	3	4	5
12. 理容師(床屋さん)	1	2	3	4	5
13. 運転手(自動車・電車)	1	2	3	4	5
14. 警察官(刑事・巡査)	1	2	3	4	5
15. 農業経営(漁業・林業)	1	2	3	4	5
16. あなたがもっともなりたい職業をかいてください。()					

III 以上の職業をえらぶとき次の点を考えましたか。1~5までに一つ○をつけて下さい。

	(1) 特に重要	(2) やや重要	(3) 普通	(4) あまり重要でない	(5) 重要でない
イ その職業は多くの収入を与え安定している。	1	2	3	4	5
ロ その職業は自分の個性を生かし能力にあっている。	1	2	3	4	5
ハ その職業が社会的地位や名声を与える。	1	2	3	4	5
ニ その職業は人々を助け人々と協力する機会を与える。	1	2	3	4	5
ホ その職業が社会に役立ち、それが自分の使命である。	1	2	3	4	5

Ⅳ 下に20種類の職業があります。それらの職業につくために必要な資格やそれをとる方法として①～③のうち一番正しいと思う項目の番号を左端の□の中に入れて下さい。

(わからない職業については空白のままよい)


1. アナウンサーに □なるためには
 - ① 標準語を話すことができれば、だれでもなれる。
 - ② NHKや他の放送局の試験にパスしなければなれない。
 - ③ 大学卒業者で放送局で3年以上のアナウンサーの訓練を受ければよい。
2. 理(美)容師に □なるためには
 - ① 理(美)容師学校を卒業して一年の実施訓練を終ればなれる。
 - ② 国家試験を受けなければならない。
 - ③ 人の髪を美しく仕上げる技術を身につけておればなれる。
3. 公務員に □なるためには
 - ① 国家(地方)公務員試験に合格すればなれる。
 - ② 公立高校か国立大学卒業者にだけなれる資格がある。
 - ③ 男女で資格はたいへん異っている。
4. 薬剤師に □なるためには
 - ① 薬局や病院で一定の訓練期間を終ればなれる。
 - ② 薬は身体と密接に関係しているので医学部も卒業しなければならない。
 - ③ 薬学に関する国家試験に合格しなければならない。
5. 外交官に □なるためには
 - ① 大学の政治学科を卒業していなければならない。
 - ② 外務省内の選挙できめられる。
 - ③ 外務公務員試験に合格すればよい。
6. 中学校の先生に □なるためには
 - ① 大学の教育学部か学芸大学を卒業していなければならない。
 - ② 一科目以上の中学教諭免許状をもっていなければならない。
 - ③ 公立でも私立の先生でも同じ採用試験を受けなければならない。
7. 医者 に □なるためには
 - ① 大学の医学課程を終り、国家試験に合格しなければならない。
 - ② 日本医師会が認めた人は医者になれる。
 - ③ 医者になるためには生物と語学が得意でなければならない。
8. 音楽家 に □なるためには
 - ① 才能さえあれば特に資格は必要でない。
 - ② 芸術大学音楽科を卒業していなければならない。
 - ③ 有名な音楽家の門下生でなければならない。
9. 弁護士 に □なるためには
 - ① 正義感が強く雄弁であればよい。
 - ② 司法試験に合格し司法研究所で研修するとなれる。
 - ③ 大学の法学部をどうしても卒業していなければならない。
10. 社会福祉士に □なるためには
 - ① 心理学や児童福祉学を学んでおくのがのぞましい。
 - ② 社会事業学を学んだ人でなければならない。
 - ③ 社会福祉関係の仕事をしている人とコネがあればなれる。



11. 運転手に ① タクシー, バス, トラック等でそれぞれ異なる免許が必要だ。
なるためには ② 地理上の知識があればよい。
 ③ 視力, 聴力など, 特によくなくてもよい。
12. 秘書に ① 秘書養成コースか, 大学卒業の学歴を必要とする。
なるためには ② タイプライター, 接待, 書類整頓などの能力は必ず必要である。
 ③ どんな分野でも秘書の仕事は全く同じである。
13. コック(料理人) ① いろいろの国の料理を作らなくてはならないので, その国に一度は行か
になるためには ねばならない。
 ② 調理士, または栄養士の試験にパスし, かなり訓練も必要である。
 ③ 大学の家政科を卒業しなければならない。
14. 電気工に ① 電気に関する基礎的知識と技術が何より大切である。
なるためには ② 子供のころからラジオの組立て, 電気器具の修繕をすることが好きであればよい。
 ③ 女子ではなれない仕事の一つである。
15. カメラマンに ① 写真学校を卒業しなければならない。
なるためには ② 新聞社, 雑誌社, 放送局で働く以外道はない。
 ③ 瞬間の働きをとらえる場合が多いので, タイミング, 構想力, 美的感覚がどうしても必要である。
16. 警察官に ① だれでも警察官採用の試験にパスすればすぐなれる。
なるためには ② 警察官養成所に入らねばならない。
 ③ 正義感にもえる人で, 力が強ければよい。
17. 船員に ① 船員養成のための高校または大学に行く必要がある。
なるためには ② 船にのり, 海をわたることの好きな男性であればよい。
 ③ 普通の高校や大学卒業者でもすぐ船員になれる。
18. セールスマンに ① 生活が不規則なので, まず体が丈夫なことが第一条件である。
なるためには ② 売る商品によって, 必要知識と適性は異なる。
 ③ 売る技術さえ持っておれば商品の専門的知識はいらない。
19. 建築家に ① 日本の古代建築物を全部見ておくことが必要である。
なるためには ② 体力や視力などは特に必要ではない。
 ③ 設計には, 製図, 物理, 力学などの勉強が必要だ。
20. デザイナーに ① 色彩, 図形などにすぐれた美的感覚をもっている人が望ましい。
なるためには ② 洋裁学校, デザイン学校を卒業していなければ, 独学ではなれない。
 ③ 女性にはなりやすいが, 男性には, もっともなりにくい職業である。

V VAT男子用

各々の画について、次のことに答えなさい。

1 イす き ロきらい ハ？		1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか（ 2 いま何をしているところですか（ 3 この人の仕事は将来どうなりますか（ 4 この人は仕事中に何を考えていますか（
2 イす き ロきらい ハ？		1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか（ 2 いま何をしているところですか（ 3 この人の仕事は将来どうなりますか（ 4 この人は仕事中に何を考えていますか（
3 イす き ロきらい ハ？		1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか（ 2 いま何をしているところですか（ 3 この人の仕事は将来どうなりますか（ 4 この人は仕事中に何を考えていますか（
4 イす き ロきらい ハ？		1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか（ 2 いま何をしているところですか（ 3 この人の仕事は将来どうなりますか（ 4 この人は仕事中に何を考えていますか（
5 イす き ロきらい ハ？		1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか（ 2 いま何をしているところですか（ 3 この人の仕事は将来どうなりますか（ 4 この人は仕事中に何を考えていますか（
6 イす き ロきらい ハ？		1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか（ 2 いま何をしているところですか（ 3 この人の仕事は将来どうなりますか（ 4 この人は仕事中に何を考えていますか（
7 イす き ロきらい ハ？		1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか（ 2 いま何をしているところですか（ 3 この人の仕事は将来どうなりますか（ 4 この人は仕事中に何を考えていますか（
8 イす き ロきらい ハ？		1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか（ 2 いま何をしているところですか（ 3 この人の仕事は将来どうなりますか（ 4 この人は仕事中に何を考えていますか（
9 イす き ロきらい ハ？		1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか（ 2 いま何をしているところですか（ 3 この人の仕事は将来どうなりますか（ 4 この人は仕事中に何を考えていますか（
10 イす き ロきらい ハ？		1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか（ 2 いま何をしているところですか（ 3 この人の仕事は将来どうなりますか（ 4 この人は仕事中に何を考えていますか（

Ⅵ 下の30項目は職業選択についてのあなたの意見をたずねているものです。今あなたの状態や考えに一致している項目には“はい”，そうでない項目には“いいえ”，どちらともいえない場合は“？”に○を一つつけて下さい。

- | | 1 | 2 | 3 |
|--|----|-----|----|
| | はい | いいえ | ？ |
| 1. 私は将来どういう職業につこうかといつも考えている。 | (1 | 2 | 3) |
| 2. 働かなくてもいいのならよいのにとすることがよくある。 | (1 | 2 | 3) |
| 3. 私は休みを利用して家の仕事やアルバイトをよくする。 | (1 | 2 | 3) |
| 4. テレビを見たり，新聞や雑誌を読むとき自分の進路のことも考える。 | (1 | 2 | 3) |
| 5. 将来の職業を考えるより今どうするかという事の方が自分には大切である | (1 | 2 | 3) |
| 6. 職業は運みたいなものによって決まるから運が向くまで待つ。 | (1 | 2 | 3) |
| 7. 私はいつでもどんな学校に行っても何を学んだらいいか考えている。 | (1 | 2 | 3) |
| 8. 進学や職業について親や先生にもっと相談したい。 | (1 | 2 | 3) |
| 9. 自分の希望している職場を見学にいったり人の話をすすんで聞く。 | (1 | 2 | 3) |
| 10. たとえ親の職業をひきついても何か進歩させようといつも考えている。 | (1 | 2 | 3) |
| 11. 進学か就職かは自分で決められる。 | (1 | 2 | 3) |
| 12. 人間は働くために生れてきたのだから自分の得意な分野で働くべきだ。 | (1 | 2 | 3) |
| 13. 自分がどういう職業に適しているかは本人より第三者の方がよくわかると思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 14. 職業について親から心理的・経済的に独立するのはうれしい。 | (1 | 2 | 3) |
| 15. 自分の将来はなるべく経験豊かな人にきめてもらった方がいいと思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 16. 親が子供の進路については最終的に責任を持つべきだと思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 17. 私は自分の入りたい学校，つきたい職業があればどこへでもいくつもりだ | (1 | 2 | 3) |
| 18. どういう仕事につくかは学校を終る時はじめて考えればよいと思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 19. 他の人の意見は参考にするが自分の将来は自分が全責任をもつつもりだ。 | (1 | 2 | 3) |
| 20. 自分の能力や適性を何とかして知ろうと努力している。 | (1 | 2 | 3) |
| 21. 私は自分が一生しようとする仕事の計画を持っている。 | (1 | 2 | 3) |
| 22. とにかく今の勉強さえしておれば将来の事は考えなくてもなんとかなると思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 23. 自分の希望する職業や高校・大学について注意深く人の話を聞いたり本を読んだりする。 | (1 | 2 | 3) |
| 24. 今もっている希望の職業は空想的で不安な気持ちがときどきする。 | (1 | 2 | 3) |
| 25. 自分がつこうとしている職業で自立できるのは何才位かという事がわかっている。 | (1 | 2 | 3) |
| 26. いま，自分の未来を予想することはほとんどできない。 | (1 | 2 | 3) |
| 27. 自分の希望する職業につくまでに費用がどの位いるか想像できる。 | (1 | 2 | 3) |
| 28. いま考えている希望の職業も将来かわるだろうと思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 29. いまなりたいと思っているその職業に必要な資格，学歴などだいたいわかっている。 | (1 | 2 | 3) |
| 30. 私は高校（または大学）を選ぶとき自分の職業を考えながら選ぶ。 | (1 | 2 | 3) |

Ⅵ a Ⅵ b Ⅵ c Ⅵ

進路調査票CDT-2 (女子用)

著者 中西信男 (不許複製) 1975年

1. 学校名()	2. 氏名()	3. 年令()	4. 学年()
5. 府県名()		6. 都市・農村(イ都心 ロ郊外 ハ農村 ニ山村 ホ漁村)	

I あなたは学校を卒業したのちにどのような計画をもっていますか(1つだけに○をつけて下さい)。

- (1) 上級学校に進学したいと思っており、父兄も賛成している。
- (2) 上級学校に進学したいと思っているが、父兄は反対している。
- (3) 就職したいと思っており、父兄も賛成している。
- (4) 就職したいと思っているが、父兄は反対している。
- (5) 家庭にいておけいこ(洋裁、お花)をしたり家事をしたいと思っており、父兄も賛成している。
- (6) 家庭にいておけいこをしたり家事をしたいと思っているが、父兄は反対している。
- (7) 将来のことは考えたこともないし、まだきまっていない。
- (8) その他(くわしく書いて下さい。自分の家の職業をつぐなど。)

II 次のような職業について、なりたいか、なりたくないかを○でかこんで下さい。すべての職業について答えて下さい。

	1. 全くなり たくない	2. なりた くない	3. どちらとも いえない	4. なり たい	5. 非常 に なり たい
1. 販売員(セールスマン・店員)	1	2	3	4	5
2. 社会事業家(ケース・ワーカー)	1	2	3	4	5
3. ジャーナリスト(記者・アナウンサー プロデューサー)	1	2	3	4	5
4. 芸術家(作家・画家・音楽家)	1	2	3	4	5
5. 芸能人(俳優・歌手・テレビタレント)	1	2	3	4	5
6. 事務員(銀行員・商社員・公務員)	1	2	3	4	5
7. 科学技術者(研究・設計)	1	2	3	4	5
8. 先生(小・中・高校)	1	2	3	4	5
9. 工場技能員(機械組立など)	1	2	3	4	5
10. 司法官(判事・検事・弁護士)	1	2	3	4	5
11. 医療(医師・看護・検査)	1	2	3	4	5
12. 美容師	1	2	3	4	5
13. 車掌(バス・ガイド)	1	2	3	4	5
14. ドレス・メーカー(洋裁・和裁)	1	2	3	4	5
15. 農業経営(漁業・林業)	1	2	3	4	5
16. あなたがもっともなりた い職業をかいてください。()					

III 以上の職業をえらぶとき次の点を考えましたか。1~5まで一つ○をつけて下さい。

	(1) 特 に 重要	(2) や や 重要	(3) 普通	(4) あ ま り 重 要 で な い	(5) 重 要 で な い
イ その職業は多くの収入を与え安定している。	1	2	3	4	5
ロ その職業は自分の個性を生かし能力にあっている。	1	2	3	4	5
ハ その職業が社会的地位や名声を与える。	1	2	3	4	5
ニ その職業は人々を助け人々と協力する機会を与える。	1	2	3	4	5
ホ その職業が社会に役立ち、それが自分の使命である。	1	2	3	4	5

IV 下に20種類の職業があります。それらの職業につくために必要な資格やそれをとる方法として①～③のうち一番正しいと思う項目の番号を左端の□の中に入れて下さい。





(わからない職業については空白のままでよい)

1. アナウンサーに ① 標準語を話すことができれば、だれでもなれる。
□なるためには ② NHKや他の放送局の試験にパスしなければなれない。
③ 大学卒業者で放送局で3年以上のアナウンサーの訓練を受ければよい。
2. 理(美)容師に ① 理(美)容師学校を卒業して一年の実施訓練を終ればなれる。
□なるためには ② 国家試験を受けなければならない。
③ 人の髪を美しく仕上げる技術を身につけておればなれる。
3. 公務員に ① 国家(地方)公務員試験に合格すればなれる。
□なるためには ② 公立高校か国立大学卒業者にだけなれる資格がある。
③ 男女で資格はたいへん異っている。
4. 薬剤師に ① 薬局や病院で一定の訓練期間を終ればなれる。
□なるためには ② 薬は身体と密接に関係しているので医学部も卒業しなければならない。
③ 薬学に関する国家試験に合格しなければならない。
5. 外交官に ① 大学の政治学科を卒業していなければならない。
□なるためには ② 外務省内の選挙できめられる。
③ 外務公務員試験に合格すればよい。
6. 中学校の先生に ① 大学の教育学部か学芸大学を卒業していなければならない。
□なるためには ② 一科目以上の中学教諭免許状をもっていればよい。
③ 公立でも私立の先生でも同じ採用試験を受けなければならない。
7. 医者に ① 大学の医学課程を終り、国家試験に合格しなければならない。
□なるためには ② 日本医師会が認めた人は医者になれる。
③ 特に医者になるためには生物と語学が得意でなければならない。
8. 音楽家に ① 才能さえあれば特に資格は必要でない。
□なるためには ② 芸術大学音楽科を卒業していなければならない。
③ 有名な音楽家の門下生でなければならない。
9. 弁護士に ① 正義感が強く雄弁であればよい。
□なるためには ② 司法試験に合格し司法研究所で研修するとなれる。
③ 大学の法学部をどうしても卒業していなければならない。
10. 社会福祉士に ① 心理学や児童福祉学を学んでおくのがのぞましい。
□なるためには ② 社会事業学を学んだ人でなければならない。
③ 社会福祉関係の仕事をしている人とコネがあればなれる。

11. 運転手に ① タクシー、バス、トラック等でそれぞれ異なる免許が必要だ。
なるためには ② 地理上の知識があればよい。
 ③ 視力、聴力など、特によくなくてもよい。
12. 秘書に ① 秘書養成コースか、大学卒業の学歴を必要とする。
なるためには ② タイプライター、接待、書類整頓などの能力は必ず必要である。
 ③ どんな分野でも秘書の仕事は全く同じである。
13. コック(料理人) ① いろいろの国の料理を作らなくてはならないので、その国に一度は行か
になるためには ねばならない。
 ② 調理士、または栄養士の試験にパスし、かなり訓練も必要である。
 ③ 大学の家政科を卒業しなければならない。
14. 電気工に ① 電気に関する基礎的知識と技術が何より大切である。
なるためには ② 子供のころからラジオの組立て、電気器具の修繕をすることが好きであ
 ればよい。
 ③ 女子ではなれない仕事の一つである。
15. カメラマンに ① 写真学校を卒業しなければならない。
なるためには ② 新聞社、雑誌社、放送局で働く以外道はない。
 ③ 瞬間の働きをとらえる場合が多いので、タイミング、構想力、美的感覚
 がどうしても必要である。
16. 警察官に ① だれでも警察官採用の試験にパスすればすぐなれる。
なるためには ② 警察官養成所に入らねばならない。
 ③ 正義感にもえる人で、力が強ければよい。
17. 船員に ① 船員養成のための高校または大学に行く必要がある。
なるためには ② 船にのり、海をわたることの好きな男性であればよい。
 ③ 普通の高校や大学卒業者でもすぐ船員になれる。
18. セールスマンに ① 生活が不規則なので、まず体が丈夫なことが第一条件である。
なるためには ② 売る商品によって、必要知識と適性は異なる。
 ③ 売る技術さえ持っておれば商品の専門的知識はいらない。
19. 建築家に ① 日本の古代建築物を全部見ておくことが必要である。
なるためには ② 体力や視力などは特に必要ではない。
 ③ 設計には、製図、物理、力学などの勉強が必要だ。
20. デザイナーに ① 色彩、図形などにすぐれた美的感覚をもっている人が望ましい。
なるためには ② 洋裁学校、デザイン学校を卒業していなければ、独学ではなれない。
 ③ 女性にはなりやすいが、男性には、もっともなりにくい職業である。

V VAT女子用

各々の画について、次のことに答えなさい。

<p>1 イす き 口きらい ハ ?</p>		<p>1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか () 2 いま何をしているところですか () 3 この人の仕事は将来どうなりますか () 4 この人は仕事中に何を考えていますか ()</p>
<p>2 イす き 口きらい ハ ?</p>		<p>1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか () 2 いま何をしているところですか () 3 この人の仕事は将来どうなりますか () 4 この人は仕事中に何を考えていますか ()</p>
<p>3 イす き 口きらい ハ ?</p>		<p>1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか () 2 いま何をしているところですか () 3 この人の仕事は将来どうなりますか () 4 この人は仕事中に何を考えていますか ()</p>
<p>4 イす き 口きらい ハ ?</p>		<p>1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか () 2 いま何をしているところですか () 3 この人の仕事は将来どうなりますか () 4 この人は仕事中に何を考えていますか ()</p>
<p>5 イす き 口きらい ハ ?</p>		<p>1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか () 2 いま何をしているところですか () 3 この人の仕事は将来どうなりますか () 4 この人は仕事中に何を考えていますか ()</p>
<p>6 イす き 口きらい ハ ?</p>		<p>1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか () 2 いま何をしているところですか () 3 この人の仕事は将来どうなりますか () 4 この人は仕事中に何を考えていますか ()</p>
<p>7 イす き 口きらい ハ ?</p>		<p>1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか () 2 いま何をしているところですか () 3 この人の仕事は将来どうなりますか () 4 この人は仕事中に何を考えていますか ()</p>
<p>8 イす き 口きらい ハ ?</p>		<p>1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか () 2 いま何をしているところですか () 3 この人の仕事は将来どうなりますか () 4 この人は仕事中に何を考えていますか ()</p>
<p>9 イす き 口きらい ハ ?</p>		<p>1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか () 2 いま何をしているところですか () 3 この人の仕事は将来どうなりますか () 4 この人は仕事中に何を考えていますか ()</p>
<p>10 イす き 口きらい ハ ?</p>		<p>1 この人はどうしてこの仕事をえらびましたか () 2 いま何をしているところですか () 3 この人の仕事は将来どうなりますか () 4 この人は仕事中に何を考えていますか ()</p>

VI 下の30項目は職業選択についてあなたの意見をたずねているものです。今あなたの状態や考えに一致している項目には“はい”，そうでない項目には“いいえ”，どちらともいえない場合は“？”に○を一つつけて下さい。

- | | 1 | 2 | 3 |
|--|----|-----|----|
| | はい | いいえ | ？ |
| 1. 私は将来どういう職業につこうかといつも考えている。 | (1 | 2 | 3) |
| 2. 働かなくてもいいのならよいのにとすることがよくある。 | (1 | 2 | 3) |
| 3. 私は休みを利用して家の仕事やアルバイトをよくする。 | (1 | 2 | 3) |
| 4. テレビを見たり，新聞や雑誌を読むとき自分の進路のことも考える。 | (1 | 2 | 3) |
| 5. 将来の職業を考えるより今どうするかという事の方が自分には大切である | (1 | 2 | 3) |
| 6. 職業は運みたいなものによって決まるから運が向くまで待つ。 | (1 | 2 | 3) |
| 7. 私はいつもどんな学校に行って何を学んだらいいか考えている。 | (1 | 2 | 3) |
| 8. 進学や職業について親や先生にもっと相談したい。 | (1 | 2 | 3) |
| 9. 自分の希望している職場を見学にいたり人の話をすすんで聞く。 | (1 | 2 | 3) |
| 10. たとえ親の職業をひきついででも何か進歩させようといつも考えている。 | (1 | 2 | 3) |
| 11. 進学か就職かは自分で決められる。 | (1 | 2 | 3) |
| 12. 人間は働くために生れてきたのだから自分の得意な分野で働くべきだ。 | (1 | 2 | 3) |
| 13. 自分がどういう職業に適しているかは本人より第三者の方がよくわかると思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 14. 職業について親から心理的・経済的に独立するのはうれしい。 | (1 | 2 | 3) |
| 15. 自分の将来はなるべく経験豊かな人にきめつけてもらった方がいいと思う | (1 | 2 | 3) |
| 16. 親が子供の進路については最終的に責任を持つべきだと思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 17. 私は自分の入りたい学校，つきたい職業があればどこへでもいくつもりだ | (1 | 2 | 3) |
| 18. どういう仕事につくかは学校を終る時はじめて考えればよいと思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 19. 他の人の意見は参考にするが自分の将来は自分が全責任をもつつもりだ。 | (1 | 2 | 3) |
| 20. 自分の能力や適性を何とかして知ろうと努力している。 | (1 | 2 | 3) |
| 21. 私は自分が一生しようとする仕事の計画を持っている。 | (1 | 2 | 3) |
| 22. とにかく今の勉強さえしておれば将来の事は考えなくてもなんとかなると思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 23. 自分の希望する職業や高校・大学について注意深く人の話を聞いたり本を読んだりする。 | (1 | 2 | 3) |
| 24. 今もっている希望の職業は空想的で不安な気持ちがときどきする。 | (1 | 2 | 3) |
| 25. 自分がつこうとしている職業で自立できるのは何才位かという事がわかっている。 | (1 | 2 | 3) |
| 26. いま，自分の未来を予想することはほとんどできない。 | (1 | 2 | 3) |
| 27. 自分の希望する職業につくまでに費用がどの位いるか想像できる。 | (1 | 2 | 3) |
| 28. いま考えている希望の職業も将来はかわるだろうと思う。 | (1 | 2 | 3) |
| 29. いまなりたいと思っているその職業に必要な資格，学歴はだいたいわかっている。 | (1 | 2 | 3) |
| 30. 私は高校（または大学）を選ぶとき自分の職業を考えながら選ぶ。 | (1 | 2 | 3) |

VI a VI b VI c VI

A STUDY OF CAREER DEVELOPMENT TEST (CDT-2)

NOBUO NAKANISHI

After reviewing many definitions on vocational and career development, "career development" is defined as the life long sequence and pattern of an individual's work-related behavior and a continual process of working out a synthesis between the self and reality opportunity of the world.

Author constructed the test designed to measure important variables which the author assumed to be most relevant to the career development. Career Development Test-1 was built up in 1965, and then is revised and entitled Career Development Test-2 in 1975.

It consists of four subtests (1) Occupational profile, (2) Occupational information, (3) Vocational apperception test, and (4) Career maturity scales. The first part provides occupational choice patterns of the student. The second subtest is to measure the amount of information concerning occupational titles and aptitudes. Vocational apperception test is a kind of projective technique, which consists of ten pictures of each occupation for boys and girls. The fourth part of CDT-2 is the scale for career maturity, which involves 30 items describing spontaneity, independence, and deliberateness of occupational choices.

The author tested the reliability and validity of two subtests of CDT-2, occupational information and career maturity. The split half reliability, based on correlation pairs of items, ranged from .40 to .46 on occupational information scale. The reliability coefficients on career maturity scale ranged from .42 to .54. The test-retest reliability of one year interval ranged from .32 to .41 on occupational information scale, and .34(girls) and .74 (boys) on career maturity scale.

The author clarified the construct validity of the test by good-poor analysis of test items and comparison of group differentials. The test scores of each scale show significant differences between junior high school student groups and senior high school student groups.

The concurrent validity consisted of the correlation between CDT-2 scores and other same kind of test. The correlation between career maturity score of CDT-2 and total score of Japanese revision of Career Development Inventory (by D. E. Super) is .489, especially high coefficient, .634, between career maturity score of CDT-2 and A (orientation) score of CDI.

The result of factor analysis of five kind tests (achievement, intelligence, vocational aptitude, and career maturity of CDT-2) shows three factors, I cognitive, II interest,

and III career maturity.

Standardization of the test based on 820 boys and 744 girls in Osaka, Hyogo and Yamaguchi Prefectures of Japan.

The possible uses of CDT-2 are varied. Assessment and evaluation of career development by CDT-2 or other same test is most emphasized in Japan. Other uses of CDT-2 include studying career development, testing in career counseling, and assessing guidance needs.